学部留学プログラム（英語圏）の包括的アンケート調査集計結果報告

研究代表：笠　原　正　秀

はじめに

中期留学を皮切りに、学部独自の留学プログラムとして学生を送り始めてから10年目となる2011年度、中期留学と中期ブリッジの現状と課題を把握することを目的にアンケート調査を実施している[1)]。その調査で用いたアンケートでは、1）留学先での満足度（語学学校やホストファミリー、あるいはプログラムそのものや運営側のサポート体制）や到達感（自分自身の英語力の変化や手応え）、2）留学前の指導（全体でのオリエンテーション・留学先別の勉強会・講演会や危機管理セミナー）などに焦点をあて、その有効性について、学生の思ったことや感じたことをありのままにフィードバックしてもらった。今回の調査でも、そのときに用いたアンケート用紙をベースとしている。今回の調査では、これらの調査内容に加え、帰国後の学生自身の行動にかかわる質問も加えた。

本調査で用いたアンケート用紙の構成は以下のとおりである。まず、アンケートの回答結果を統計的に処理するためのカギとなる基礎質問として、1）アンケート回答時の年齢、2）プログラムに参加した時の年齢、3）留学先の国名、4）留学先語学学校名、5）参加プログラム、6）留学全体をとおしての総合評価（10段階評価）とその理由（自由記述）を配置した。

次に、アンケートの本体でもある個々の項目は以下のとおりである。まず、留学前と帰国後の自分自身の英語力にかんして、各分野（スピーキング・リスニング・リーディング・ライティングの四技能に加え、文法力・語彙力）の自己評価（10段階評価）してもらった。しかし、これはあくまでも自己評価であり、実際に個人の修得している英語力ではない。ここでのポイントは、留学することにより学生が感じている、学生自身の英語に対する自信の変化をみることができるものと考えている[2)]。また、こうした英語力を測定する判断材料としてTOEICを利用しているが、その適切さについても学生の意見を自由記述の形で聴取している。

続いて、留学先語学学校や専門学校にかんする質問を配置している。授業内容をはじめ、すべての要素を加味した上で語学学校への満足度（10段階評価）を回答してもらった。また、日本人の数・日本人や日本語環境に対する自分自身の素直な気持ち・課題の量・課題の質などについて、選択と自由記述の両方で聴取している。

個別項目の3点目として、留学期間中の対人関係について質問している。ホストファミリーやルームメイトとの関係・語学学校で出会った日本人以外の学生との関係・椙山からいっしょに留学した仲間を含む日本人同士の関係など、留学期間中、学生に身の回りに起

---

1) 詳細については、笠原（2012）を参照していただきたい。

2) 中期留学プログラムにかんしては、年度ごとに『中期留学報告書』を出している。その巻末に中期留学担当統括者がTOEICの結果（留学前と帰国後の得点の変化など）をまとめているので、そちらを参照されたい。

こった対人関係、特にトラブルの有無を調査した。実際にそうした経験のある場合は、その内容について記述してもらうようにした。異文化において、こうした問題は切っても切り離せない関係にあるものだが、逆にこうした側面は苦い思い出でもあり、なかなか表面に表れてこないものでもある。学部で実施しているプログラムは、半年間（6-7 か月）という比較的長期間のプログラムから 4-6 週間という短期のものまで、異文化滞在期間に幅があり、異文化沈潜期間と対人関係との間に何らかの関係性を見出すことができるものと考えている。

個別項目の 4 点目として、留学全般についての質問を配置している。たとえば、1）留学の目的（複数回答）、2）費用、3）日本や名古屋あるいは自分の生まれ育った町についての知識不足を感じた経験、4）留学前に履修を勧めたい科目や自学自習しておいた方がよいと思われることなどを選択および自由記述の両方で質問している。特に、3）の点については、本研究の共同研究者でもある木村教授が、笠原（2012）に示されていた学生の回答内容からヒントを得、英文・地域紹介パンフレット『We're The Nagoyans!』をゼミの有志の学生たちとともに作成した経緯がある。本報告書では木村教授から、『We're The Nagoyans!』の評価についても報告がなされている。詳細については、そちらを参照されたい。

最後に、留学プログラムの事前指導および帰国後の学生自身の行動にかんする質問をしている。1）全体で行われたガイダンス（団結式など）の有効性、2）留学先別の勉強会の有効性や回数の適切性、3）保護者会の有効性、4）危機管理セミナーの有効性、といった事前指導にあたるものや、5）留学から帰ってきたことを意識して登録した履修科目の有無や、6）留学で得たものを失わないようにするために自分自身が日常行っている努力など、事後において学生自身が自主的にとっている行動について、選択および自由記述の両方で聴取している。

以上、5 つの観点から留学プログラムの全体像を把握するためのデータ収集をおこなっているが、中期留学と中期ブリッジにかんしては 2009 年度から 2011 年度の 3 か年にわたり、こうしたアンケート調査を継続的に行っており、今回報告する内容はその 3 か年分の集計である。また、J-SHINE にかんしては、2011 年度の第 1 期生に対して実施されたアンケートの集計である。ただし、今回はアンケートの中の数量的に処理できる部分だけを報告するにとどめている。自由記述部分に記載された内容については、IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4 を用いて、テキスト分析をしたうえで別の機会に報告したいと考えている。

I. プログラム別基礎データ集計結果

本項は、アンケートの基礎質問部分を留学プログラム別に集計したものである。本調査で対象としている学部留学プログラム（英語圏）の留学先および調査協力者数は以下に示すとおりである。中期留学と中期ブリッジにかんしては、2009年度からこうした留学満足度の調査を継続しており、これら2つのプログラムは2009年度から2011年度の3か年にわたるプログラム参加者数が対象となっている。J-SHINEは、2011年度が初めて学生を送り出した年であり、今回の調査ではその第１期生のみのデータを報告している。

A) 中期留学

【年齢】

Q.　あなたの年齢をお答えください。

Q.　留学に出発した時のあなたの年齢をお答えください。

表I-1.　年齢（アンケート回答時と留学開始時）

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
アンケート回答時の年齢	83	20	21	20.16	.366
留学開始年齢	83	19	20	19.52	.503
有効なケースの数（リストごと）	83				

中期留学プログラムは、基本的には2年次後期に半年間留学するプログラムであるため、留学時の平均年齢が19.52才、アンケート回答時の年齢が20.16才となっている[1)]。また、2009年度の学生（83名中36名、43.4%）の場合は、新型インフルエンザが世界中に蔓延した年でもあり、そうした世界的状況の収束が見え始めた約半年後（後期終了後）の出発となり、3年次の前期終了後（夏休み中）に帰国するスケジュールとなった。そのため、若干、平均年齢を高めているものと思われる。

1) 留学時期にかんしては、厳密には3年次後期という選択肢も作られてはいるが、就職活動の時期や昨今の就職困難な社会的状況もあり、特に2008年のリーマンショック以降、3年次後期に中期留学に行く学生は皆無であった。それ以前の時期を含めても、3年次後期に中期留学に行った学生は若干名であった。

【留学先】

Q.　あなたの留学先をお答えください。

表I-2.　留学先

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	ヴィクトリア	16	19.3	19.3	19.3
	エジンバラ	14	16.9	16.9	36.1
	デイトン	7	8.4	8.4	44.6
	ウェリントン	8	9.6	9.6	54.2
	モナシュ	11	13.3	13.3	67.5
	タスマニア	13	15.7	15.7	83.1
	サンディエゴ	10	12.0	12.0	95.2
	ゴールドスミス	4	4.8	4.8	100.0
	合計	83	100.0	100.0	

留学先人数のばらつきをみるために χ^2 検定を実施したが、留学先の人数に有意な差は認められなかった；$\chi^2(7)=10.590, p=.158, n.s.$。つまり、統計上、各留学先による人数のばらつき（差）はない、といえる。デイトン・ウェリントン・ゴールドスミスの 3 校の人数が他と比べて少ないように見えるが、デイトンは 2009 年度、新型インフルエンザの影響から出発・帰国のスケジュールが大きく変更されたため 2 名希望していた学生のうち 1 名が辞退した。万が一の場合を想定し、学生 1 名では送らない、というルールに則り、2009 年度は学生をデイトンに送っていない[2)]。また、ウェリントンは椙山の学期スケジュールとのズレが大きくなり、前期終盤の授業や前期試験が受験できないなど、スケジュール上の問題が深刻になってきたため、提携の解除を視野に入れた検討がなされ、1 年間学生を送っていない年がある。そうした事情から、デイトンとウェリントンは 2 か年分の人数となっている。ゴールドスミスは新規に開拓した学校であり、2011 年度の学生が第 1 期生であった。そのため、コールドスミスの学生数は 1 期生のみの数となっている。

2) その 1 名の学生は 2010 年度休学し、個人留学の形でデイトン大学に出発して行った。その翌年、椙山女学園大学を退学し、現在、デイトン大学の正規の学部生としてビジネスを専攻している。

B) 海外英語演習B（春季中期ブリッジ）

【年齢】

Q. あなたの年齢をお答えください。

Q. 留学に出発した時のあなたの年齢をお答えください。

表I-3. 年齢（アンケート回答時と留学開始時）

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
アンケート回答時の年齢	19	21	19.74	.582
留学開始年齢	18	20	19.56	.629

中期ブリッジは中期留学とは異なり、学年指定のプログラムではないため、どの学年でも参加可能なプログラムとなっている。ただし、1年生の場合は夏季プログラムには諸手続きが間に合わないこともあり、春季プログラムから参加することが可能となっている。そのため、留学開始最少年齢が18才というのは1年次での参加であったことがわかる。度数分布をとってみると、2009年から2011年の3年間で5名、該当する学生のいたことがわかる。また、留学開始年齢の平均値が19.56才であることから、多くの学生が2年次に利用しているプログラムであることがわかる。この点を確認するために度数分布をとってみると、留学開始年齢のモードは20才（70名中44名、62.9%）、アンケート回答時の年齢のモードが20才（70名中42名、60%）となっている。

表I-4. 留学先

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	モナシュ	12	17.1	17.6	17.6
	西オーストラリア	11	15.7	16.2	33.8
	マセイ	23	32.9	33.8	67.6
	キャンベラ	12	17.1	17.6	85.3
	クィーンズランド	10	14.3	14.7	100.0
	合計	68	97.1	100.0	
欠損値	999	2	2.9		
合計		70	100.0		

留学先が未記入であった学生が2名いた（欠損値として処理）。留学先人数のばらつきをみるためにχ^2検定を実施したが、有意な差は認められなかった；$\chi^2(4)=8.324$, $p=.080$, *n.s.*。つまり、統計上、各留学先による人数のばらつき（差）はない、といえる。2010年度より、西オーストラリア大学・マセイ大学オークランド校・マセイ大学パーマーストンノース校の3校が新たに加わった。マセイ大学の人数が他と比べて人数が多いようにみえるのは、

当初から中期ブリッジ提携校であったマセイ大学ウェリントン校とオークランド校・パーマーストンノース校を個別に集計は扱わず、マセイ大学として処理しているためである。今後は、ウェリントン校・オークランド校・パーマーストンノース校に分けて集計していきたいと考えている。

C) 海外英語演習 C（J-SHINE）

J-SHINE は 2011 年度が初めて学生を送り出した年であり、今回の調査では第 1 期生のみのデータが対象となっている。そのため、人数は 11 名、留学先もバンクーバー（カナダ）にあるインターナショナルハウス 1 か所である。

【年齢】

Q.　あなたの年齢をお答えください。

Q.　留学に出発した時のあなたの年齢をお答えください。

表I-5.　年齢（アンケート回答時と留学開始時）

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
留学開始年齢	11	20	22	20.64	.809
アンケート回答時の年齢	11	20	22	21.09	.831
有効なケースの数（リストごと）	11				

J-SHINE は、英語力増強を主な目的とした他留学プログラムとは異なり、「小学校英語指導者資格[3]」取得を目的とする資格取得留学であるため、学年層が高いことがうかがえる。留学時年齢の平均値が 20.64 才であるところから、2 年生以上の学生が申し込んでいることがわかる。度数分布をとってみると、留学時年齢で 20 才未満は 0 名、20 才が 6 名で最多、21 才が 3 名、22 才が 2 名となっている。

[3] 小学校での英語活動・英語教育を行う上で、必要な知識と技能を有し、児童英語教育指導者として十分な能力を有すると J-SHINE が認めたもので、「小学校英語指導者」は J-SHINE の認定する資格すべての基本となる資格（http://www.alc.co.jp/kid/naritai/naru/saiyo/shikaku4.html の 1 項目めより引用）のこと。この他に J-SHINE の認定する資格として、「小学校英語準認定指導者資格」「小学校英語上級指導者資格」「小学校英語指導者育成トレーナー資格」などがある。

II. 中期留学（2009-2011）のアンケート集計結果

ここからは中期留学（2009-2011）のみのアンケート集計結果を開示する。ただし、本項で開示する集計データは数量的に処理できるものだけにとどめ、自由記述された回答については IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4 でテキスト分析を行ったうえで、別の機会に提示したいと考えている。

まず、プログラムの総合満足度を示す。次に、自身の英語力（自己評価）にかんする質問への回答結果を英語運用能力の区分ごとにみていく。本調査では、スピーキング・リスニング・リーディング・ライティングといった四技能に加え、文法力や語彙力についても、留学前と帰国後の2時点での自身の英語力を10段階で自己評価してもらった。また、留学中の英語学習への取り組みや、英語力を客観的に測る尺度として TOEIC を採用していることについても学生からの意見をきいている。

続いて、留学先（語学学校や専門学校）を10段階で総合評価してもらった。また、留学先の日本人の数や出された課題の量、その課題の効果（質）についてもきいている。さらに、留学中、現地での対人関係の状況を把握するため、1）ホストファミリーやルームメイト、2）他国からの留学生、3）椙山からいっしょに留学した仲間を含む対日本人学生、といったケースに分け、質問している。

留学全般にかかわることとしては、1）留学の目的（複数回答可）、2）日本や名古屋にかんする知識不足を感じさせられた経験、3）留学にかかった金額などについて質問している。最後に、事前指導と留学から帰国後の自分自身の行動についてもきいている。具体的には、1）先輩からの体験談の有効性、2）旅行代理店からの情報の有効性、3）保護者会の有効性、4）大学主催の危機管理セミナーの有効性、5）オリエンテーションや勉強会の内容の良し悪しやその回数の適切性、6）留学パンフレットに掲載されていた内容の過不足、7）留学で得たものを失わないように自分自身が努力していること、8）帰国後に留学したことを意識し、登録した科目の有無などである。

こうした点をしっかりと把握しておくことで、学部で実施している各種留学プログラムの全体像を検証することが可能であり、検討すべき課題の存在も容易にみつけだすことができるものと考える。また、いかにそうした点を改善していくか、その方策を考えるヒントを提供してくれるものにもなりうると考える。

【参加留学プログラムの総合評価】

Q. 今回参加した留学プログラムの総合満足度（期間・かかった費用・留学先語学学校での授業内容や先生・ホストファミリーあるいは寮など、すべてを考慮）を 10 段階で評価してください。

表II-1. 留学プログラム・留学先別総合満足度評価

留学先	平均値	度数	標準偏差
ヴィクトリア	8.63	16	1.025
エディンバラ	8.57	14	1.089
デイトン	7.14	7	1.069
ウェリントン	8.38	8	.916
モナシュ	7.82	11	1.471
タスマニア	7.62	13	.768
サンディエゴ	8.10	10	1.197
ゴールドスミス	5.50	4	1.732
合計	7.99	83	1.302

参加プログラムの総合満足度の平均値として7.99という数値が示されている。笠原（2012）を参照すると、中期留学の総合評価は8.00であった。同様の結果と判断する。ANOVA を実施したところ、留学先の満足度に5%水準で有意な差が認められた；$F(7, 75)=5.040$, $p=.000$, $\eta^2=.320$。また、Tukey HSD 検定を実施したところ、ヴィクトリア–ゴールドスミス ($p=.000$, 95% Cl [1.17, 5.08])；エディンバラ–ゴールドスミス ($p=.000$, 95% Cl [1.09, 5.06])；ウェリントン–ゴールドスミス ($p=.002$, 95% Cl [.73, 5.02])；モナシュ–ゴールドスミス ($p=.015$, 95% Cl [.27, 4.36])；タスマニア–ゴールドスミス ($p=.031$, 95% Cl [.11, 4.12])；サンディエゴ–ゴールドスミス ($p=.005$, 95% Cl [.53, 4.67])の間に5%水準で有意な差があることが確認された。上記6校に留学したグループの留学プログラムの総合評価は、ゴールドスミスに留学したグループと比べ、有意に高いことがわかった。

〈英語力にかんする質問〉

【プログラム別・留学先別　留学前・留学後のスピーキング力（自己評価）】

Q. 留学前、あなたのスピーキング力はどれくらいであったと自己評価しますか。

Q. 帰国後の現在、あなたのスピーキング力はどれくらいであると自己評価しますか。

表II-2. 留学先別留学前・留学後のスピーキング力の自己評価とその伸長

留学先学校		留学前 スピーキング力	留学後 スピーキング力	留学前後のスピーキングの伸長
ヴィクトリア	平均値	3.44	7.13	3.69
	度数	16	16	16
	標準偏差	1.263	1.258	1.401
エディンバラ	平均値	3.50	6.64	3.14
	度数	14	14	14
	標準偏差	1.286	1.082	.949
デイトン	平均値	3.29	6.14	2.86
	度数	7	7	7
	標準偏差	1.254	1.345	1.215
ウェリントン	平均値	3.00	6.75	3.75
	度数	8	8	8
	標準偏差	.756	.707	.707
モナシュ	平均値	3.45	6.18	2.73
	度数	11	11	11
	標準偏差	2.067	1.168	1.737
タスマニア	平均値	3.77	6.69	2.92
	度数	13	13	13
	標準偏差	1.363	1.032	.760
サンディエゴ	平均値	3.70	6.10	2.40
	度数	10	10	10
	標準偏差	1.160	1.197	.843
ゴールドスミス	平均値	2.25	4.00	1.75
	度数	4	4	4
	標準偏差	.957	.816	.957
合計	平均値	3.42	6.46	3.04
	度数	83	83	83
	標準偏差	1.345	1.262	1.224

ANOVA を実施したところ、留学前のスピーキング力に対する自己評価に有意な差は認められなかった；$F(7, 75)=.733$, $p=.645$, *n.s.*, $\eta^2=.064$。しかし、帰国後のスピーキング力に対する自己評価：$F(7, 75)=4.073$, $p=.001$, $\eta^2=.275$、と留学前と帰国後の自己評価の伸び：$F(7, 75)=2.484$, $p=.024$, $\eta^2=.188$、に5%水準で有意な差が確認された。Tukey HSD 検定を実施したところ、帰国後のスピーキング力に対する自己評価に5%水準で有意な差がみられたのは、ヴィクトリア–ゴールドスミス ($p=.000$, 95% Cl [1.17, 5.08]) ；エディンバラ–ゴールドスミス ($p=.002$, 95% Cl [.66, 4.63]) ；ウェリントン–ゴールドスミス ($p=.004$, 95% Cl [.61, 4.89]) ；モナシュ–ゴールドスミス ($p=.028$, 95% Cl [.14, 4.23]) ；タスマニア–ゴールドスミス ($p=.002$, 95% Cl [.69, 4.69]) ；サンディエゴ–ゴールドスミス ($p=.045$, 95% Cl [.03, 4.17]) の間に5%水準で有意な差があることが確認された。上記6校に留学したグループはゴールドスミスに留学したグループより、自身の帰国後のスピーキング力の自己評価が有意に高いことがわかった。留学前と帰国後の自己評価の伸びに5%水準で有意な差がみられたので、Tukey HSD 検定を実行したが、有意差の生じた個所は示されていなかった。IBM SPSS Statistics Base 21 のバグであろうか。

【プログラム別・留学先別　留学前・留学後のリスニング力（自己評価）】

Q.　留学前、あなたのリスニング力はどれくらいであったと自己評価しますか。

Q.　帰国後の現在、あなたのリスニング力はどれくらいであると自己評価しますか。

表II-3.　留学前・留学後のリスニング力の自己評価とその伸長

留学先学校		留学前 リスニング力	留学後 リスニング力	留学前後のリスニングの伸長
ヴィクトリア	平均値	4.13	7.88	3.75
	度数	16	16	16
	標準偏差	1.500	1.025	1.342
エディンバラ	平均値	4.00	7.29	3.29
	度数	14	14	14
	標準偏差	1.359	.726	.825
デイトン	平均値	3.71	7.14	3.43
	度数	7	7	7
	標準偏差	1.254	1.864	1.272
ウェリントン	平均値	3.25	7.38	4.13
	度数	8	8	8
	標準偏差	1.035	1.061	1.356
モナシュ	平均値	3.91	6.73	2.82
	度数	11	11	11
	標準偏差	2.386	1.348	1.991
タスマニア	平均値	3.85	7.23	3.38
	度数	13	13	13
	標準偏差	1.463	1.235	.870
サンディエゴ	平均値	4.60	7.70	3.10
	度数	10	10	10
	標準偏差	1.075	1.059	.876
ゴールドスミス	平均値	2.25	5.50	3.25
	度数	4	4	4
	標準偏差	.957	1.732	2.217
合計	平均値	3.88	7.28	3.40
	度数	83	83	83
	標準偏差	1.525	1.262	1.306

ANOVA を実施したところ、留学前のリスニング力に対する自己評価：$F(7, 75)=1.280$, $p=.272$, *n.s.*, $\eta^2=.107$、と留学前と帰国後の自己評価の伸び：$F(7, 75)=.921$, $p=.495$, *n.s.*, $\eta^2=.079$、に留学先間で有意な差は認められなかった。留学前はどのグループも自身のリスニング力を同程度に評価をしていることがわかった。また、留学前と帰国後のリスニング力の伸びも同程度であることがわかった。しかし、帰国後の自身のリスニング力に対する自己評価には5%水準で有意な差が確認された；$F(7, 75)=2.375$, $p=.030$, $\eta^2=.181$。Tukey HSD 検定を実

施したところ、帰国後のリスニング力に対する自己評価に5%水準で有意な差がみられたのはヴィクトリア–ゴールドスミス間であった (p=.000, 95% CI [1.17, 5.08]) 。ゴールドスミスに留学したグループよりヴィクトリアに留学したグループの方が、帰国後のリスニング力の自己評価は有意に高いことがわかった。

【プログラム別・留学先別　留学前・留学後のリーディング力（自己評価)】

Q.　留学前、あなたのリーディング力はどれくらいであったと自己評価しますか。

Q.　帰国後の現在、あなたのリーディング力はどれくらいであると自己評価しますか。

表II-4.　留学前・留学後のリーディング力の自己評価とその伸長

留学先学校		留学前 リーディング力	留学後 リーディング力	留学前後のリーディングの伸長
ヴィクトリア	平均値	4.31	6.75	2.44
	度数	16	16	16
	標準偏差	1.852	1.183	1.825
エディンバラ	平均値	3.64	5.86	2.21
	度数	14	14	14
	標準偏差	1.393	1.351	1.051
デイトン	平均値	3.14	6.43	3.29
	度数	7	7	7
	標準偏差	1.215	1.134	1.113
ウェリントン	平均値	3.25	6.88	3.63
	度数	8	8	8
	標準偏差	.886	1.356	1.061
モナシュ	平均値	4.18	6.09	1.91
	度数	11	11	11
	標準偏差	1.601	.944	1.700
タスマニア	平均値	4.23	6.15	1.92
	度数	13	13	13
	標準偏差	1.922	1.725	1.754
サンディエゴ	平均値	3.80	5.90	2.10
	度数	10	10	10
	標準偏差	1.398	1.287	.994
ゴールドスミス	平均値	2.75	4.75	2.00
	度数	4	4	4
	標準偏差	.500	1.258	1.414
合計	平均値	3.83	6.20	2.37
	度数	83	83	83
	標準偏差	1.552	1.350	1.504

ANOVA を実施したところ、留学前のリーディング力に対する自己評価：$F(7, 75)=1.096$, $p=.375$, *n.s.*, $\eta^2=.093$、帰国後のリーディング力に対する自己評価：$F(7, 75)=1.651$, $p=.134$, *n.s.*, $\eta^2=.134$、留学前と帰国後の自己評価の伸び：$F(7, 75)=1.677$, $p=.128$, *n.s.*, $\eta^2=.135$、に留学先

間で有意な差は認められなかった。リーディング力にかんしては、留学前の段階においても、帰国後においても、どのグループも自身のリーディング力を同程度に評価していることがわかった。また、留学前–帰国後の伸びにかんしても同程度であることがわかった。

【プログラム別・留学先別　留学前・留学後のライティング力（自己評価）】

Q.　留学前、あなたのライティング力はどれくらいであったと自己評価しますか。

Q.　帰国後の現在、あなたのライティング力はどれくらいであると自己評価しますか。

表II-5.　留学前・留学後のライティング力（自己評価）とその伸長

留学先学校		留学前 ライティング力	留学後 ライティング力	留学前後のライティングの伸長
ヴィクトリア	平均値	4.06	6.56	2.50
	度数	16	16	16
	標準偏差	1.289	1.365	1.265
エディンバラ	平均値	3.86	6.36	2.50
	度数	14	14	14
	標準偏差	1.167	1.216	1.225
デイトン	平均値	3.57	6.57	3.00
	度数	7	7	7
	標準偏差	1.134	1.512	1.414
ウェリントン	平均値	2.50	7.13	4.63
	度数	8	8	8
	標準偏差	1.069	1.553	1.188
モナシュ	平均値	4.27	6.36	2.09
	度数	11	11	11
	標準偏差	1.954	.809	2.071
タスマニア	平均値	3.92	6.15	2.23
	度数	13	13	13
	標準偏差	1.498	1.463	1.092
サンディエゴ	平均値	4.40	6.60	2.20
	度数	10	10	10
	標準偏差	.966	.966	1.398
ゴールドスミス	平均値	2.75	4.50	1.75
	度数	4	4	4
	標準偏差	.957	1.291	1.258
合計	平均値	3.82	6.40	2.58
	度数	83	83	83
	標準偏差	1.398	1.325	1.515

ANOVA を実施したところ、留学前のライティング力に対する自己評価：$F(7, 75)=2.043$, $p=.061$, *n.s.*, $\eta^2=.160$、帰国後のライティング力に対する自己評価：$F(7, 75)=1.780$, $p=.104$, *n.s.*, $\eta^2=.142$、に留学先間で有意な差は認められなかった。ライティング力にかんしては、留学前の段階においても、帰国後においても、どのグループも自身のライティング力に同程度

の評価をしていることがわかった。しかし、留学前と帰国後のライティング力（自己評価）の伸びに有意な差が認められた；$F(7, 75)=3.201$, $p=.005$, $\eta^2=.230$。Tukey HSD 検定を実施したところ、ウェリントン–ヴィクトリア ($p=.016$, 95% Cl [.25, 4.00])；ウェリントン–エディンバラ ($p=.020$, 95% Cl [.20, 4.05])；ウェリントン–モナシュ ($p=.005$, 95% Cl [.52, 4.55])；ウェリントン–タスマニア ($p=.006$, 95% Cl [.45, 4.34])；ウェリントン–サンディエゴ ($p=.010$, 95% Cl [.37, 4.48])；ウェリントン–ゴールドスミス ($p=.024$, 95% Cl [.22, 5.53]) の、ウェリントンと他6校（デイトンを除く）との間に5%水準で有意な差のあることがわかった。ウェリントンに留学したグループはヴィクトリア・エディンバラ・モナシュ・タスマニア・サンディエゴ・ゴールドスミスに留学したグループに比べて、留学前–帰国後のライティング力の自己評価の伸びが有意に高いことがわかった。

【プログラム別・留学先別　留学前・留学後の文法力（自己評価）】

Q.　留学前、あなたの文法力はどれくらいであったと自己評価しますか。

Q.　帰国後の現在、あなたの文法力はどれくらいであると自己評価しますか。

表II-6.　留学前・留学後の文法力の自己評価とその伸長

留学先学校		留学前文法力	留学後文法力	留学前後の文法力の伸長
ヴィクトリア	平均値	5.00	7.00	2.00
	度数	16	16	16
	標準偏差	1.366	1.265	.966
エディンバラ	平均値	4.50	6.50	2.00
	度数	14	14	14
	標準偏差	1.605	1.160	1.301
デイトン	平均値	5.43	6.71	1.29
	度数	7	7	7
	標準偏差	1.618	2.215	1.113
ウェリントン	平均値	3.25	6.75	3.50
	度数	8	8	8
	標準偏差	1.035	1.035	1.195
モナシュ	平均値	4.27	6.36	2.09
	度数	11	11	11
	標準偏差	1.794	1.362	1.514
タスマニア	平均値	5.00	6.54	1.54
	度数	13	13	13
	標準偏差	2.121	1.506	.877
サンディエゴ	平均値	5.10	6.70	1.60
	度数	10	10	10
	標準偏差	1.663	1.494	.843
ゴールドスミス	平均値	3.25	3.75	.50
	度数	4	4	4
	標準偏差	.957	.500	1.000

合計	平均値	4.61	6.52	1.90
	度数	83	83	83
	標準偏差	1.688	1.485	1.255

ANOVA を実施したところ、留学前の自身の文法力に対する自己評価に、留学先間で有意な差は認められなかった；$F(7, 75)=1.893$, $p=.082$, *n.s.*, $\eta^2=.150$。帰国後の自己評価：$F(7, 75)=2.635$, $p=.017$, $\eta^2=.197$、と留学前と帰国後の文法力（自己評価）の伸び：$F(7, 75)=3.865$, $p=.001$, $\eta^2=.265$、に有意な差が認められた。Tukey HSD 検定を実施したところ、帰国後の文法力の自己評価にかんしては、ヴィクトリア–ゴールドスミス ($p=.002$, 95% CI [.83, 5.67])；エディンバラ–ゴールドスミス ($p=.018$, 95% CI [.29, 5.21])；デイトン–ゴールドスミス ($p=.023$, 95% CI [.25, 5.68])；ウェリントン–ゴールドスミス ($p=.016$, 95% CI [.34, 5.66])；モナシュ–ゴールドスミス ($p=.038$, 95% CI [.08, 5.15])；タスマニア–ゴールドスミス ($p=.017$, 95% CI [.31, 5.27])；サンディエゴ–ゴールドスミス ($p=.013$, 95% CI [.38, 5.52]) との間に5%水準で有意な差のあることがわかった。つまり、ヴィクトリア・エディンバラ・デイトン・モナシュ・タスマニア・サンディエゴに留学したグループは、ゴールドスミスに留学したグループに比べて、帰国後の文法力の自己評価が有意に高いことがわかった。また、留学前–帰国後のリスニング力（自己評価）の伸びにかんしては、ウェリントン–デイトン($p=.007$, 95% CI [.40, 4.03])；ウェリントン–タスマニア($p=.005$, 95% CI [.38, 3.54])；ウェリントン–サンディエゴ($p=.014$, 95% CI [.24, 3.56])；ウェリントン–ゴールドスミス($p=.001$, 95% CI [.85, 5.15]) との間に5%水準で有意な差のあることがわかった。つまり、ウェリントンに留学したグループは、デイトン・タスマニア・サンディエゴ・ゴールドスミスに留学したグループと比べて、留学前–帰国後の文法力の伸びが有意に高いことがわかった。

【プログラム別・留学先別　留学前・留学後の語彙力（自己評価）】

Q.　留学前、あなたの語彙力はどれくらいであったと自己評価しますか。

Q.　帰国後の現在、あなたの語彙力はどれくらいであると自己評価しますか。

表II-7.　留学前・留学後の語彙力の自己評価とその伸長

留学先学校		留学前語彙力	留学後語彙力	留学前後の語彙力の伸長
ヴィクトリア	平均値	3.75	6.69	2.94
	度数	16	16	16
	標準偏差	1.065	1.352	1.181
エディンバラ	平均値	2.86	5.36	2.50
	度数	14	14	14
	標準偏差	.949	.929	.650
デイトン	平均値	4.57	5.86	1.29
	度数	7	7	7
	標準偏差	1.134	1.345	.756

ウェリントン	平均値	3.38	7.63	4.25
	度数	8	8	8
	標準偏差	1.408	.916	1.581
モナシュ	平均値	3.36	5.82	2.45
	度数	11	11	11
	標準偏差	1.963	1.168	2.339
タスマニア	平均値	3.77	5.69	1.92
	度数	13	13	13
	標準偏差	1.589	1.377	.760
サンディエゴ	平均値	3.60	6.40	2.80
	度数	10	10	10
	標準偏差	1.776	1.838	1.398
ゴールドスミス	平均値	3.25	4.75	1.50
	度数	4	4	4
	標準偏差	.957	1.258	1.732
合計	平均値	3.54	6.08	2.54
	度数	83	83	83
	標準偏差	1.425	1.442	1.492

ANOVA を実施したところ、留学前の自身の語彙力に対する自己評価に、留学先間で有意な差は認められなかった；$F(7, 75)=1.162$, $p=.335$, *n.s.*, $\eta^2=.098$。帰国後の自己評価：$F(7, 75)=3.669$, $p=.002$, $\eta^2=.255$、と留学前と帰国後の語彙力（自己評価）の伸び：$F(7, 75)=3.712$, $p=.002$, $\eta^2=.257$、に有意な差が認められた。Tukey HSD 検定を実施したところ、帰国後の語彙力の自己評価にかんしては、ウェリントン–エディンバラ ($p=.004$, 95% Cl [.47, 4.07])；ウェリントン–タスマニア ($p=.030$, 95% Cl [.11, 3.76])；ウェリントン–ゴールドスミス ($p=.012$, 95% Cl [.39, 5.36]) との間に5%水準で有意な差のあることがわかった。ウェリントンに留学したグループはエディンバラ・タスマニア・ゴールドスミスに留学したグループに比べて、帰国後、自身の語彙力の自己評価が有意に高いことがわかった。また、留学前–帰国後の語彙力（自己評価）の伸びにかんしては、ウェリントン–デイトン($p=.001$, 95% Cl [.79, 5.13])；ウェリントン–タスマニア($p=.006$, 95% Cl [.44, 4.21])；ウェリントン–ゴールドスミス($p=.027$, 95% Cl [.18, 5.32]) との間に5%水準で有意な差のあることがわかった。ウェリントンに留学したグループはデイトン・タスマニア・ゴールドスミスに留学したグループに比べて、留学前–帰国後の語彙力の自己評価の伸びが有意に大きいことがわかった。

【留学期間中の英語学習への取り組み】

Q.　あなたの留学期間中の英語学習への取り組みを 10 段階で評価してください。

表II-8.　留学期間中の英語学習への取り組み

留学先	平均値	度数	標準偏差
ヴィクトリア	7.94	16	1.611
エディンバラ	7.64	14	1.216

デイトン	7.57	7	1.134
ウェリントン	8.00	8	.756
モナシュ	7.09	11	1.136
タスマニア	7.15	13	.555
サンディエゴ	7.22	9	1.302
ゴールドスミス	5.00	4	.816
合計	7.40	82	1.294

ANOVA を実施したところ、自身の留学期間中の英語学習への取り組みに対する自己評価に、留学先により有意な差のあることがわかった；$F(7, 75)=3.492, p=.003, \eta^2=.248$。Tukey HSD 検定を実施したところ、ヴィクトリア–ゴールドスミス ($p=.001$, 95% Cl [.89, 4.98])；エディンバラとゴールドスミス ($p=.004$, 95% Cl [.57, 4.72])；デイトン–ゴールドスミス ($p=.017$, 95% Cl [.28, 4.87])；ウェリントン–ゴールドスミス ($p=.002$, 95% Cl [.76, 5.24])；タスマニア–ゴールドスミス ($p=.039$, 95% Cl [.06, 4.25])；サンディエゴ–ゴールドスミス ($p=.046$, 95% Cl [.02, 4.42]) との間に5%水準で有意な差のあることがわかった。ヴィクトリア・エディンバラ・デイトン・ウェリントン・タスマニア・サンディエゴに留学したグループはゴールドスミスに留学したグループに比べて、留学期間中の自身の英語学習の取り組みに対して、有意に高い自己評価をしていることがわかった。

【TOEIC の利用についての評価】

Q. 現在、留学の成果として、英語力の測定に TOEIC を利用していますが、適切だと思いますか。

表II-9. 留学の成果としての英語力測定にTOEICを利用することの適切性

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	適切だと思う	17	20.5	20.7	20.7
	どちらかといえば適切だと思う	34	41.0	41.5	62.2
	どちらでもない	19	22.9	23.2	85.4
	あまり適切だとは思わない	12	14.5	14.6	100.0
	合計	82	98.8	100.0	
欠損値	999	1	1.2		
合計		83	100.0		

χ^2検定を実施したところ、回答に5%水準で有意な差のあることがわかった；$\chi^2(3)=13.122$, $p=.004$。“適切だと思う”あるいは“どちらかといえば適切だと思う”といった留学前–帰国後の英語力の測定尺度として TOEIC を利用することを肯定的に受け止めている学生は、82名中51名（62%）おり、多くの学生は留学前–帰国後の英語力の測定尺度として TOEIC を利用することに対して“適切”であると判断している、といえる。

〈留学先の評価〉

【留学先への満足度】

Q.　留学先への総合評価・満足度はどれくらいですか。（10 段階評価）

表II-10.　留学先への満足度（10段階評価）

留学先	平均値	度数	標準偏差
ヴィクトリア	8.00	16	1.461
エディンバラ	8.14	14	1.512
デイトン	7.00	7	1.291
ウェリントン	8.75	8	1.035
モナシュ	6.64	11	1.433
タスマニア	6.46	13	1.050
サンディエゴ	8.20	10	1.229
ゴールドスミス	5.00	4	3.559
合計	7.47	83	1.713

ANOVA を実施したところ、留学先への満足度に有意な差のあることがわかった；$F(7, 75)=4.953$, $p=.000$, $\eta^2=.316$。Tukey HSD 検定を実施したところ、ウェリントン–タスマニア($p=.020$, 95% Cl [.21, 4.36])；ウェリントン–ゴールドスミス($p=.002$, 95% Cl [.92, 6.58])；ヴィクトリア–ゴールドスミス($p=.012$, 95% Cl [.42, 5.58])；エディンバラ–ゴールドスミス($p=.008$, 95% Cl [.52, 5.76])；サンディエゴ–ゴールドスミス($p=.011$, 95% Cl [.47, 5.93]) の間に5%水準で有意な差のあることがわかった。つまり、ウェリントンに留学したグループはタスマニア・ゴールドスミスと比べて、ヴィクトリア・エディンバラ・サンディエゴの3校に留学したグループはゴールドスミスと比べて、留学先に対する評価が有意に高いことがわかった。

【日本人の数】

Q.　留学先にいた日本人の数に対して、どのように感じましたか。

表II-11.　留学先にいた日本人の数

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	多すぎる	22	26.5	26.8	26.8
	多い	27	32.5	32.9	59.8
	どちらでもない	10	12.0	12.2	72.0
	少ない	16	19.3	19.5	91.5
	少なすぎる	7	8.4	8.5	100.0
	合計	82	98.8	100.0	
欠損値	999	1	1.2		
合計		83	100.0		

χ^2検定を実施したところ、回答に5%水準で有意な差のあることがわかった；$\chi^2(4)=16.659$, $p=.002$。“多すぎる”あるいは“多い”と回答した学生は、82名中49名（60%）に及んでいる。留学先を個別にみてみると、ヴィクトリアとサンディエゴにかんしては、全員が“多すぎる”あるいは“多い”のいずれかに回答している。英語圏の国々はどこに行っても日本人がたくさんいるようであるが、デイトンとゴールドスミスにかんしては、全員が“少ない”あるいは“少なすぎる”と回答している。留学先により日本人の数に大きな差があることがわかった。

【留学先での課題の量】

Q. 留学先で出されていた課題の量はいかがでしたか。

表II-12. 留学先で出されていた課題の量

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	多すぎる	4	4.8	4.8	4.8
	多い	18	21.7	21.7	26.5
	どちらでもない	36	43.4	43.4	69.9
	少ない	23	27.7	27.7	97.6
	少なすぎる	2	2.4	2.4	100.0
	合計	83	100.0	100.0	

χ^2検定を実施したところ、回答に5%水準で有意な差のあることがわかった；$\chi^2(4)=47.663$, $p=.000$。“どちらでもない”あるいは“少ない”と回答した学生は、83名中59名（71%）に及んでいる。負担になるほどではなかった、あるいはやや少なめ、と理解した。留学先を個別にみてみると、モナシュ・タスマニア・サンディエゴにかんしては、全員が“どちらでもない”あるいは“少ない”のいずれかに回答している。逆に、ヴィクトリア・デイトン・ウェリントンにかんしては、全員が“多い”あるいは“どちらでない”のいずれかに回答している。これら3校で、“多すぎる”と回答した学生はヴィクトリア1名；デイトン2名；ウェリントン1名であった。留学先により課題の量に違いがあることがわかった。ヴィクトリアは Communicative Course と Academic Course の選択肢があるため、学生がどちらのコースを選ぶかにもよるが、Academic Course は学部あるいは大学院への進学を想定してのコースであるため、課題は多いといえる。デイトンとウェリントンは、基本的に学部や大学院に進学する上で求められる英語力の修得を目的とするコースであるため、課題も多く、厳しく鍛えられるコースといえる。

【留学先での課題の効果】

Q.　留学先で出されていた課題は、自分の英語力を伸ばす上で役に立ったと思いますか。

表II-13.　留学先での課題の効果

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	大いに役立った	20	24.1	24.4	24.4
	役に立った	50	60.2	61.0	85.4
	どちらでもない	6	7.2	7.3	92.7
	あまり役に立たなかった	6	7.2	7.3	100.0
	合計	82	98.8	100.0	
欠損値	999	1	1.2		
合計		83	100.0		

χ^2検定を実施したところ、回答に5%水準で有意な差のあることがわかった；$\chi^2(3)=62.976$, $p=.000$。“大いに役に立った”あるいは“役に立った”と回答している学生は、82名中70名（85.4%）に及んでいる。留学先で出された課題は、自身の英語力を鍛える上で役に立つものであったと評価していることがわかった。留学先を個別にみてみると、ヴィクトリア・ウェリントン・サンディエゴにかんしては、全員が“大いに役立った”あるいは“役に立った”のいずれかに回答している。逆に、“あまり役に立たなかった”という回答もモナシュ3名；タスマニア2名；ゴールドスミス1名あった。

〈現地での対人関係に関する質問〉

【ホストファミリー・ルームメートとの対人関係】

Q.　ホストファミリーやルームメイトとの間に何かトラブルはありましたか。

表II-14.　ホストファミリーもしくはルームメイトとの対人関係

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	はい	33	39.8	40.7	40.7
	いいえ	48	57.8	59.3	100.0
	合計	81	97.6	100.0	
欠損値	999	2	2.4		
合計		83	100.0		

χ^2検定を実施したところ、回答に有意な差は認められなかった；$\chi^2(1)=2.778$, $p=.096$。ホストファミリーやルームメイトとの間に何らかのトラブルを経験した学生とそうした経験はしなかった学生の数に差はないことがわかった。しかし、対人関係におけるトラブルを経験した学生が81名中33名（40.7%）おり、異文化において対人関係にまつわるトラブルは、

ある程度避けられないもの、と覚悟すべきといえる。 デイトン・モナシュ・サンディエゴにおいては、回答者数の半数以上（50%以上）が“はい”と回答している。また、タスマニアも46.2%の学生が“はい”と回答している。

【留学先に来ていた他国からの留学生との対人関係】

Q. 留学先に来ていた他国からの留学生との間に何かトラブルはありましたか。

表II-15. 他国の学生との対人関係

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	はい	9	10.8	11.0	11.0
	いいえ	73	88.0	89.0	100.0
	合計	82	98.8	100.0	
欠損値	999	1	1.2		
合計		83	100.0		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(1)=49.951, p=.000$。つまり、他の国々から留学先に来ている学生との間に何らかのトラブルを経験した学生より、そうした経験をしなかった学生の方が有意に多いことがわかった。他国からの留学生と何らかのトラブルを経験している学生は、エディンバラ3名（14名中、21.4%）；ウェリントン2名（8名中、25.0%）；モナシュ1名（11名中、9.10%）；タスマニア2名（13名中、15.4%）；サンディエゴ1名（10.0%）であった。

【現地での日本人学生との対人関係】

Q. 現地で出会った日本人やいっしょに留学に行った椙山の学生との間に何かトラブルはありましたか。

表II-16. 他日本人留学生との対人関係

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	はい	17	20.5	20.5	20.5
	いいえ	66	79.5	79.5	100.0
	合計	83	100.0	100.0	

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(1)=28.928, p=.000$。つまり、他の日本人留学生や椙山からいっしょに行った仲間との間に何らかのトラブルを経験した学生より、そうした経験をしなかった学生の方が有意に多いことがわかった。他の日本人や椙山からいっしょに行った仲間との間に何らかのトラブルを経験している学生は、ヴィクトリア1名（16名中、6%）；エディンバラ4名（14名中、28.6%）；デイトン2名（7名中、28.6%）；モナシュ3名（11名中、27.3%）；タスマニア3名（13名中、23.1%）；サンディエゴ2名（10名中、20.0%）であった。

〈留学全般に関する質問〉

【留学の目的】

Q.　この留学に求めていたものは何ですか。（複数回答）

表II-17.　留学の目的

		応答数		ケースのパーセント
		N	パーセント	
留学目的[a]	スピーキングの力を伸ばす	81	18.2%	97.6%
	リスニングの力を伸ばす	70	15.7%	84.3%
	リーディングの力を伸ばす	26	5.8%	31.3%
	ライティングの力を伸ばす	22	4.9%	26.5%
	文法力をしっかりと身につける	13	2.9%	15.7%
	語彙力を伸ばす	46	10.3%	55.4%
	異文化体験（つらいことも含め）	76	17.1%	91.6%
	観光をたっぷり楽しむ	30	6.7%	36.1%
	海外に友人や知り合いを作る	68	15.3%	81.9%
	その他	13	2.9%	15.7%
合計		445	100.0%	536.1%

a. グループ

回答数が10%を超えているものをリストアップしてみると、英語力にかんするものとしては、“スピーキング”“リスニング”“語彙”の力を伸ばす、というものがあげられる。いわゆる“プラクティカル（実用）”な側面の英語力の増強が中期留学に参加した目的といえる。また、“異文化体験”“海外に友人や知り合いを作る”といった経験の豊かさや人間関係の拡大を望んでの留学であることもわかる。

【日本や名古屋に関する知識不足の経験】

Q.　日本のことや名古屋のことをもっと知っておけばよかった、勉強しておけばよかった、と思うような経験を現地でしましたか。

表II-18.　日本や名古屋に関する知識不足を感じた経験の有無

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そういう経験をした	72	86.7	86.7	86.7
	そういう経験はしなかった	11	13.3	13.3	100.0
	合計	83	100.0	100.0	

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(1)=44.831, p=.000$。現地に行き、日本や名古屋に関する知識がなく恥ずかしい思いをした、という学生の方が、

そうした経験をしなかった学生よりも有意に多いことがわかった。人数的には、83名中72名（88.0%）の学生がそうした経験をしており、非常に高い確率でそうした場面に出会っていることがわかる。タスマニア（13名）とゴールドスミス（4名）に至っては、全員がそうした経験をした、と回答している。

【留学にかかった費用に対する評価】

Q.　参加したプログラムにかかった費用についてどう思いますか。

表II-19.　留学にかかった費用

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	非常に高い	22	26.5	26.8	26.8
	高い	44	53.0	53.7	80.5
	どちらでもない	16	19.3	19.5	100.0
	合計	82	98.8	100.0	
欠損値	999	1	1.2		
合計		83	100.0		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(2)=15.902, p=.000$。“非常に高い”あるいは“高い”といった評価を合わせると82名中66名（80.5%）となる。中期留学は6–7か月の留学プログラムでもあり、額面上のかかる費用については“高い”という印象になるのは致し方ないと思われるが、これはあくまでも実際にかかった費用に対しての印象であり、費用対効果の意味ではないと理解したい。

〈事前指導に関する評価〉

【先輩の体験談などの有用性】

Q.　全体での説明会や留学先別に個別の活動として行われた先輩からの体験談は、実際に現地で生活する上で役に立ちましたか。

表II-20.　先輩の体験談などの有効性

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	大いに役に立った	23	27.7	28.8	28.8
	役に立った	47	56.6	58.8	87.5
	どちらでもない	7	8.4	8.8	96.3
	あまり役に立たなかった	2	2.4	2.5	98.8
	まったく役に立たなかった	1	1.2	1.3	100.0
	合計	80	96.4	100.0	
欠損値	999	3	3.6		
合計		83	100.0		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(4)=94.500, p=.000$。“大いに役に立った”あるいは“役に立った”といった評価を合わせると80名中70名（87.5%）となっている。中期留学説明会や留学シンポジウム、あるいは留学先ごとに行っている勉強会などで先輩たちから語られる体験談などは、次に出発する学生たちにとって、たいへん意味のあるものになっていることがわかった。

【JTB による旅行関係情報の有用性】

Q. JTB 担当者からの旅行関係情報（保険、持ち物など）は役に立ちましたか。

表II-21. 旅行代理店からの情報の有効性

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	大いに役に立った	13	15.7	15.9	15.9
	役に立った	38	45.8	46.3	62.2
	どちらでもない	18	21.7	22.0	84.1
	あまり役に立たなかった	9	10.8	11.0	95.1
	まったく役に立たなかった	4	4.8	4.9	100.0
	合計	82	98.8	100.0	
欠損値	999	1	1.2		
合計		83	100.0		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(4)=42.024, p=.000$。“大いに役に立った”あるいは“役に立った”といった評価を合わせると82名中51名（62.2%）となっている。中期留学の場合、渡航説明会やビザ申請等の手続きといったさまざまな機会をつうじ、情報の提供を旅行代理店（JTB）に行ってもらっているが、学生にとり、役に立つ情報の提供がきちんとなされていることがわかった。

【保護者会の有効性】

Q. 保護者会は、保護者の方の留学に対する理解を深めるのに役に立ちましたか。

表II-22. 保護者会の有効性

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	大いに役に立った	18	21.7	21.7	21.7
	役に立った	52	62.7	62.7	84.3
	どちらでもない	10	12.0	12.0	96.4
	あまり役に立たなかった	1	1.2	1.2	97.6
	まったく役に立たなかった	2	2.4	2.4	100.0
	合計	83	100.0	100.0	

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(4)=105.735, p=.000$。“大いに役に立った”あるいは“役に立った”といった評価を合わせると83名中70名（84.3%）

となっている。中期留学の場合、2月下旬もしくは3月上中旬に保護者会を実施し、1）プログラムの全体像、2）単位認定について、3）留学先別のプログラム詳細説明などを行っているが、こうした機会を持つことで、学生の目から見て、親に留学を理解してもらう（親を説得する）ための有効な機会となっていることがわかった。

【危機管理セミナーの有用性】

Q. 昨年の６月中旬、モナシュ大学から櫻木真由美さんがお見えになり、女性の視点から、留学中の危機管理についてお話をしてくださいましたが、彼女の話は、実際に現地で生活する上で役に立ちましたか。

表II-23. 危機管理セミナーの有効性

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	大いに役に立った	27	32.5	32.5	32.5
	役に立った	42	50.6	50.6	83.1
	どちらでもない	11	13.3	13.3	96.4
	あまり役に立たなかった	2	2.4	2.4	98.8
	参加していない	1	1.2	1.2	100.0
	合計	83	100.0	100.0	

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(4)=74.771, p=.000$。“大いに役に立った”“役に立った”といった評価を合わせると83名中69名（83.1%）となっている。モナシュ大学のMUELC (Monash University English Language Centre) に所属している櫻木真由美氏には、2か年（2010年度・2011年度）にわたり椙山女学園大学としての海外渡航における危機管理セミナーを実施してもらってきた。それ以前にも、学部講演会として2回（2008年度・2009年度）、海外生活における危機管理にかんする話をしてもらう機会を持っている。今回の結果を見てのとおり、学生からの評判・評価もたいへん高い。また、取り上げる内容も、海外でたくさんの日本人学生の出会うトラブルを目の当たりにしてきただけに、経験に裏打ちされた興味深い内容であった。

【オリエンテーションや各留学先別に行われた勉強会の有用性】

Q. 全体でのオリエンテーションや留学先別の勉強会など（中期ブリッジでは、団結式なども含む）、出発までいろいろと行ってきましたが、その内容はいかがでしたか。

表II-24. オリエンテーションや勉強会の有効性

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	大いに役に立った	18	21.7	22.0	22.0
	役に立った	49	59.0	59.8	81.7
	どちらでもない	11	13.3	13.4	95.1
	あまり役に立たなかった	3	3.6	3.7	98.8
	まったく役に立たなかった	1	1.2	1.2	100.0
	合計	82	98.8	100.0	
欠損値	999	1	1.2		
合計		83	100.0		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(4)=92.146, p=.000$。“大いに役に立った”あるいは“役に立った”といった評価を合わせると82名中67名（81.7%）となっている。全体でのオリエンテーションや留学先ごとに実施している勉強会などは、それぞれ学生にとり有効な内容が提供されていることがわかった。その一方で、“あまり役に立たなかった”あるいは“まったく役に立たなかった”とする回答もモナシュ（11名中1名、9.1%）とゴールドスミス（4名中3名、75.0%）にみられた。

【オリエンテーションや留学先別に行われた勉強会の回数に対する評価】

Q. オリエンテーションや留学先別の勉強会など（中期ブリッジでは、団結式なども含む）、の回数はいかがでしたか。

表II-25. オリエンテーションや勉強会の回数

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	多い	3	3.6	3.6	3.6
	ちょうどいい	64	77.1	77.1	80.7
	少ない	12	14.5	14.5	95.2
	少なすぎる	4	4.8	4.8	100.0
	合計	83	100.0	100.0	

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(3)=122.542, p=.000$。“多すぎる”とする回答はなく（0名）、“多い”とする回答も83名中3名（3.6%）であった。“ちょうどいい”とする回答が83名中64名（77.1%）であり、こうした結果から、全体でのオリエンテーションや留学先ごとに実施している勉強会などの回数は適当と判断していることがわかった。

〈留学パンフレットに対する評価〉

【オリエンテーションや留学先別に行われた勉強会の回数に対する評価】

Q. 学部主催の留学プログラムに関する情報は、『Studying Abroad Programs 20XX』に掲載されている内容で十分でしたか。

表II-26. 留学パンフレットの情報量

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	はい	73	88.0	89.0	89.0
	いいえ	9	10.8	11.0	100.0
	合計	82	98.8	100.0	
欠損値	999	1	1.2		
合計		83	100.0		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(1)=49.951, p=.000$。学部留学プログラムの内容がまとめられている『Studying Abroad Programs 20XX』に掲載されている内容は、現在、学生の求めている留学情報を十分に載せている、と評価していることがわかった。その一方で、『Studying Abroad Programs 20XX』に掲載されている内容は十分ではない、とする意見もヴィクトリア（16名中1名、6.3%）；エディンバラ（13名中1名、7.7%）；モナシュ（11名中2名、18.2%）；タスマニア（13名中2名、15.4%）；サンディエゴ（9名中1名、11.1%）；ゴールドスミス（4名中2名、50.0%）にみられた。

〈留学後の履修に関する質問〉

Q. 留学から帰国後、自分の英語力をはじめとし、英語圏で生活してきたことにより学び取った何かを失わないように、忘れないように普段努力をしていることはありますか。

表II-27. 留学で得た力を落とさないための努力の有無[1)]

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	している	59	71.1	93.7	93.7
	していない	4	4.8	6.3	100.0
	合計	63	75.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	20	24.1		
合計		83	100.0		

1) この質問項目は、2010年度学部留学プログラムの検証に用いられた質問用紙より加えられたものであるため、2009年度の学生は入っていない。

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(1)=48.016, p=.000$。中期留学に参加した学生63名中59名（93.7%）が留学で得たものを維持すべく、帰国後も何らかの努力をしている、と回答している。その一方で、タスマニア（10名中1名、10.0%）；サンディエゴ（10名中2名、20.0%）；ゴールドスミス（4名中1名、25.0%）は、そうした努力はしていない、という回答もみられた。

Q. 履修登録した科目で、留学から帰国したことを意識して登録した科目はありますか。

表II-28. 留学経験を意識した履修登録科目の有無[2)]

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
	ある	55	66.3	87.3	87.3
有効	ない	8	9.6	12.7	100.0
	合計	63	75.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	20	24.1		
合計		83	100.0		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(1)=35.063, p=.000$。中期留学に参加した学生63名中55名（87.3%）が、留学から帰国したことを意識した履修登録している、と回答している。その一方で、ヴィクトリア（11名中1名、9.1%）；ウェリントン（4名中1名、25.0%）；モナシュ（7名中1名、14.3%）；タスマニア（10名中2名、20.0%）；サンディエゴ（10名中3名、30.0%）は、留学から帰国したことを意識した履修登録はしていない、という回答もみられた。

2) この質問項目は、2010年度学部留学プログラムの検証に用いられた質問用紙より加えられたものであるため、2009年度の学生は入っていない。

III. 中期ブリッジ（2009-2011）のアンケート集計結果

ここからは中期ブリッジ（2009-2011）のみのアンケート集計結果を開示する。ただし、本項で開示する集計データは数量的に処理できるものだけにとどめ、自由記述された回答については IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4 でテキスト分析を行ったうえで、別の機会に提示したいと考えている。

まず、プログラムの総合満足度を示す。次に、自身の英語力（自己評価）にかんする質問への回答結果を英語運用能力の区分ごとにみていく。本調査では、スピーキング・リスニング・リーディング・ライティングといった四技能に加え、文法力や語彙力についても、留学前と帰国後の2時点での自身の英語力を10段階で自己評価してもらった。また、留学中の英語学習への取り組みや、英語力を客観的に測る尺度として TOEIC を採用していることについても学生からの意見をきいている。

続いて、留学先（語学学校や専門学校）を10段階で総合評価してもらった。また、留学先の日本人の数や出された課題の量、その課題の効果の有無についてもきいている。さらに、留学中、現地での対人関係の状況を把握するため、1）ホストファミリーやルームメイト、2）他国からの留学生、3）椙山からいっしょに留学した仲間を含む対日本人学生といったケースに分け、質問している。

留学全般にかかわることとしては、1）留学の目的（複数回答可）、2）日本や名古屋にかんする知識不足を感じさせられた経験、3）留学にかかった金額などについて質問している。最後に、事前指導と留学から帰国後の自分自身の行動についてもきいている。具体的には、1）先輩からの体験談の有効性、2）旅行代理店からの情報の有効性、3）保護者会の有効性、4）大学主催の危機管理セミナーの有効性、5）オリエンテーションや勉強会の内容の良し悪しやその回数の適切性、6）留学パンフレットに掲載されていた内容の過不足、7）留学で得たものを失わないように自分自身が努力していること、8）帰国後に留学したことを意識し、登録した科目の有無などである。

こうした点をしっかりと把握しておくことで、学部で実施している各種留学プログラムの全体像を検証することが可能であり、検討すべき課題の存在も容易にみつけだすことができるものと考える。また、いかにそうした点を改善していくか、その方策を考えるヒントを提供してくれるものにもなりうると考える。

【参加留学プログラムの総合評価】

Q.　今回参加した留学プログラムの総合満足度（期間・かかった費用・留学先語学学校での授業内容や先生・ホストファミリーあるいは寮など、すべてを考慮）を 10 段階で評

価してください。

表III-1. 留学の総合満足度

留学先学校	平均値	度数	標準偏差
モナシュ	8.67	12	.888
西オーストラリア	8.45	11	1.508
マセイ	7.91	23	1.621
キャンベラ	7.83	12	1.586
クィーンズランド	7.90	10	1.287
合計	8.12	68	1.441

参加プログラムの総合満足度の平均値として8.12という数値が示されている。笠原(2012)を参照すると、中期ブリッジの総合評価は8.32であった。同様の結果と判断する。ANOVA を実施したところ、留学先の満足度に有意な差は認められなかった ; $F(4, 63)=.869$, $p=.488$, *n.s.*, $\eta^2=.052$。どの留学先グループも留学プログラム全体として、同様の評価をしていることがわかった。

〈英語力に関係する質問〉

【プログラム別・留学先別　留学前・留学後のスピーキング力（自己評価)】

Q. 留学前、あなたのスピーキング力はどれくらいであったと自己評価しますか。

Q. 帰国後の現在、あなたのスピーキング力はどれくらいであると自己評価しますか。

表III-2 留学前・留学後のスピーキング力（自己評価）とその伸長

留学先学校		留学前スピーキング力	留学後スピーキング力	留学前後のスピーキングの伸長
モナシュ	平均値	3.92	6.00	2.08
	度数	12	12	12
	標準偏差	1.084	1.128	.515
西オーストラリア	平均値	3.82	6.09	2.27
	度数	11	11	11
	標準偏差	1.250	1.375	.647
マセイ	平均値	3.61	5.74	2.13
	度数	23	23	23
	標準偏差	1.616	1.685	1.180
キャンベラ	平均値	3.25	5.42	2.17
	度数	12	12	12
	標準偏差	1.357	1.621	1.193
クィーンズランド	平均値	4.70	6.60	1.90
	度数	10	10	10
	標準偏差	2.111	1.350	.994

合計	平均値	3.79	5.91	2.12
	度数	68	68	68
	標準偏差	1.541	1.494	.970

ANOVA を実施したところ、留学前のスピーキング力に対する自己評価に有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=1.370, p=.254, n.s., \eta^2=.080$。また、帰国後のスピーキング力に対する自己評価にも有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=.986, p=.421, n.s., \eta^2=.059$。留学前-帰国後のスピーキング力における自己評価の伸びもまた有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=.199, p=.938, n.s., \eta^2=.012$。どの留学先グループも留学前のスピーキング力・帰国後のスピーキング力に対して同様の自己評価をしており、留学前–帰国後のスピーキング力の自己評価の伸びも同様であることがわかった。

【プログラム別・留学先別　留学前・留学後のリスニング力（自己評価）】

Q.　留学前、あなたのリスニング力はどれくらいであったと自己評価しますか。

Q.　帰国後の現在、あなたのリスニング力はどれくらいであると自己評価しますか。

表III-3.　留学前・留学後のリスニング力（自己評価）とその伸長

留学先学校		留学前リスニング力	留学後リスニング力	留学前後のリスニングの伸長
モナシュ	平均値	4.25	6.25	2.00
	度数	12	12	12
	標準偏差	1.357	1.215	.953
西オーストラリア	平均値	4.36	6.64	2.27
	度数	11	11	11
	標準偏差	1.502	1.567	1.104
マセイ	平均値	4.26	6.74	2.48
	度数	23	23	23
	標準偏差	1.573	1.356	1.123
キャンベラ	平均値	4.00	6.42	2.42
	度数	12	12	12
	標準偏差	1.044	1.379	1.564
クィーンズランド	平均値	5.20	6.90	1.70
	度数	10	10	10
	標準偏差	1.874	1.449	1.059
合計	平均値	4.37	6.60	2.24
	度数	68	68	68
	標準偏差	1.495	1.362	1.173

ANOVA を実施したところ、留学前のリスニング力に対する自己評価に有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=1.004, p=.412, n.s., \eta^2=.060$。また、帰国後のリスニング力に対する自己評価にも有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=1.004, p=.421, n.s., \eta^2=.026$。留学前–帰国後のリスニング力における自己評価の伸びにおいても有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=.960, p=.436, n.s., \eta^2=.057$。どの留学先グループも留学前のリスニング力・帰国後のリスニング力に対して同様の自己評価をしており、留学前–帰国後のリスニング力の自己評価の伸びも同様であることがわかった。

【プログラム別・留学先別　留学前・留学後のリーディング力（自己評価）】

Q.　留学前、あなたのリーディング力はどれくらいであったと自己評価しますか。

Q.　帰国後の現在、あなたのリーディング力はどれくらいであると自己評価しますか。

表III-4.　留学前・留学後のリーディング力（自己評価）とその伸長

留学先学校		留学前リーディング力	留学後リーディング力	留学前後のリーディングの伸長
モナシュ	平均値	4.25	5.83	1.58
	度数	12	12	12
	標準偏差	1.545	1.801	.996
西オーストラリア	平均値	3.73	5.82	2.09
	度数	11	11	11
	標準偏差	1.555	1.471	1.578
マセイ	平均値	4.30	5.74	1.43
	度数	23	23	23
	標準偏差	1.636	1.514	1.237
キャンベラ	平均値	4.50	6.08	1.58
	度数	12	12	12
	標準偏差	1.446	1.505	1.443
クィーンズランド	平均値	4.70	5.80	1.10
	度数	10	10	10
	標準偏差	1.418	1.619	.738
合計	平均値	4.29	5.84	1.54
	度数	68	68	68
	標準偏差	1.526	1.532	1.239

ANOVA を実施したところ、留学前のリーディング力に対する自己評価に有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=.599, p=.665, n.s., \eta^2=.037$。また、帰国後のリーディング力に対する自己評価にも有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=.097, p=.983, n.s., \eta^2=.006$。留学前と帰国後のリーディング力における自己評価の伸びにおいても有意な差は認められなかっ

た；$F(4, 63)=.902, p=.468, n.s., \eta^2=.054$。どの留学先グループも留学前のリーディング力・帰国後のリーディング力に対して同様の自己評価をしており、留学前–帰国後のリーディング力の自己評価の伸びも同様であることがわかった。

【プログラム別・留学先別　留学前・留学後のライティング力（自己評価）】

Q.　留学前、あなたのライティング力はどれくらいであったと自己評価しますか。

Q.　帰国後の現在、あなたのライティング力はどれくらいであると自己評価しますか。

表III-5.　留学前・留学後のライティング力（自己評価）とその伸長

留学先学校		留学前ライティング力	留学後ライティング力	留学前後のライティングの伸長
モナシュ	平均値	4.58	6.08	1.50
	度数	12	12	12
	標準偏差	1.505	1.311	1.243
西オーストラリア	平均値	3.91	5.73	1.82
	度数	11	11	11
	標準偏差	1.578	1.421	.982
マセイ	平均値	4.70	6.13	1.43
	度数	23	23	23
	標準偏差	1.428	1.456	1.121
キャンベラ	平均値	5.00	6.75	1.75
	度数	12	12	12
	標準偏差	1.651	1.658	1.055
クィーンズランド	平均値	5.00	7.10	2.10
	度数	10	10	10
	標準偏差	1.764	1.524	1.449
	平均値	4.65	6.31	1.66
合計	度数	68	68	68
	標準偏差	1.553	1.499	1.154

ANOVA を実施したところ、留学前のライティング力に対する自己評価に有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=.911, p=.463, n.s., \eta^2=.055$。また、帰国後のライティング力に対する自己評価にも有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=1.572, p=.193, n.s., \eta^2=.091$。留学前と帰国後のライティング力における自己評価の伸びにおいても有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=.697, p=.597, n.s., \eta^2=.042$。どの留学先グループも留学前のライティング力・帰国後のライティング力に対して同様の自己評価をしており、留学前–帰国後のライティング力の自己評価の伸びも同様であることがわかった。

【プログラム別・留学先別　留学前・留学後の文法力（自己評価）】

Q.　留学前、あなたの文法力はどれくらいであったと自己評価しますか。

Q.　帰国後の現在、あなたの文法力はどれくらいであると自己評価しますか。

表III-6.　留学前・留学後の文法力（自己評価）とその伸長

留学先学校		留学前文法力	留学後文法力	留学前後の文法力の伸長
モナシュ	平均値	4.50	5.92	1.42
	度数	12	12	12
	標準偏差	1.567	1.084	1.084
西オーストラリア	平均値	4.73	6.27	1.55
	度数	11	11	11
	標準偏差	1.272	1.348	1.036
マセイ	平均値	4.74	6.04	1.30
	度数	23	23	23
	標準偏差	1.544	1.296	1.222
キャンベラ	平均値	5.25	6.83	1.58
	度数	12	12	12
	標準偏差	2.006	1.749	1.165
クィーンズランド	平均値	5.30	6.40	1.10
	度数	10	10	10
	標準偏差	1.418	1.430	.994
合計	平均値	4.87	6.25	1.38
	度数	68	68	68
	標準偏差	1.564	1.375	1.107

ANOVA を実施したところ、留学前の文法力に対する自己評価に有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=.582, p=.676, n.s., \eta^2=.036$。また、帰国後の文法力に対する自己評価にも有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=.869, p=.488, n.s., \eta^2=.052$。留学前と帰国後の文法力における自己評価の伸びにおいても有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=.339, p=.851, n.s., \eta^2=.021$。どの留学先グループも留学前の文法力・帰国後の文法力に対して同様の自己評価をしており、留学前–帰国後の文法力の自己評価の伸びも同様であることがわかった。

【プログラム別・留学先別　留学前・留学後の語彙力（自己評価）】

Q.　留学前、あなたの語彙力はどれくらいであったと自己評価しますか。

Q.　帰国後の現在、あなたの語彙力はどれくらいであると自己評価しますか。

表III-7. 留学前・留学後の語彙力（自己評価）とその伸長

留学先学校		留学前語彙力	留学後語彙力	留学前後の語彙力の伸長
モナシュ	平均値	3.75	5.42	1.67
	度数	12	12	12
	標準偏差	1.288	1.311	.888
西オーストラリア	平均値	3.82	5.82	2.00
	度数	11	11	11
	標準偏差	1.722	1.471	1.414
マセイ	平均値	3.96	5.74	1.78
	度数	23	23	23
	標準偏差	1.186	1.356	1.166
キャンベラ	平均値	4.00	5.92	1.92
	度数	12	12	12
	標準偏差	1.477	1.165	1.240
クィーンズランド	平均値	4.40	6.10	1.70
	度数	10	10	10
	標準偏差	1.838	1.524	1.059
合計	平均値	3.97	5.78	1.81
	度数	68	68	68
	標準偏差	1.424	1.337	1.136

ANOVA を実施したところ、留学前の語彙力に対する自己評価に有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=.319$, $p=.864$, *n.s.*, $\eta^2=.020$。また、帰国後の語彙力に対する自己評価にも有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=.389$, $p=.816$, *n.s.*, $\eta^2=.024$。留学前と帰国後の語彙力における自己評価の伸びにおいても有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=.169$, $p=.953$, *n.s.*, $\eta^2=.011$。どの留学先グループも留学前の語彙力・帰国後の語彙力に対して同様の自己評価をしており、留学前–帰国後の語彙力の自己評価の伸びも同様であることがわかった。

【留学期間中の英語学習への取り組み】

Q. あなたの留学期間中の英語学習への取り組みを 10 段階で評価してください。

表III-8. 留学期間中の英語学習への取り組み（10段階評価）

留学先学校	平均値	度数	標準偏差
モナシュ	7.25	12	1.055
西オーストラリア	6.73	11	1.849
マセイ	7.43	23	1.441
キャンベラ	7.83	12	1.528
クィーンズランド	8.00	10	1.414
合計	7.44	68	1.480

ANOVA を実施したところ、自身の留学期間中の英語学習への取り組みに対する自己評価に、留学先による有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=1.278$, $p=.288$, *n.s.*, $\eta^2=.075$。どの留学先グループも留学期間中の自身の英語学習の取り組みに対して同様の自己評価をしていることがわかった。

【TOEIC の利用についての評価】

Q. 現在、留学の成果として、英語力の測定に TOEIC を利用していますが、適切だと思いますか。

表III-9. 留学の成果としての英語力測定にTOEICを利用することの適切性

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	適切だと思う	13	18.6	18.6	18.6
	どちらかといえば適切だと思う	42	60.0	60.0	78.6
	どちらでもない	6	8.6	8.6	87.1
	あまり適切だとは思わない	9	12.9	12.9	100.0
	合計	70	100.0	100.0	

χ^2検定を実施したところ、回答に5%水準で有意な差のあることがわかった；$\chi^2(3)=47.143$, $p=.000$。“適切だと思う”あるいは“どちらかといえば適切だと思う”といった留学前–帰国後の英語力の測定尺度として TOEIC を利用することを肯定的に受け止めている学生は、70名中55名（78.6%）おり、多くの学生は留学前・帰国後の英語力の測定尺度に TOEIC を利用することに対して“適切”であると判断している、といえる。

〈留学先の評価〉

【留学先への満足度】

Q. 留学先への総合評価・満足度はどれくらいですか。（10 段階評価）

表III-10. 留学先への満足度（10段階評価）

留学先学校	平均値	度数	標準偏差
モナシュ	7.75	12	1.485
西オーストラリア	6.91	11	2.700
マセイ	7.83	23	2.146
キャンベラ	8.00	12	1.537
クィーンズランド	8.40	10	1.506
合計	7.78	68	1.961

ANOVA を実施したところ、留学先への満足度に有意な差は認められなかった；$F(4, 63)=.825, p=.514, \eta^2=.050$。どのグループも留学先に対して同様の評価をしていることがわかった。

【日本人の数】

Q. 留学先にいた日本人の数に対して、どのように感じましたか。

表III-11. 留学先にいた日本人の数

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	多すぎる	15	21.4	21.7	21.7
	多い	28	40.0	40.6	62.3
	どちらでもない	11	15.7	15.9	78.3
	少ない	7	10.0	10.1	88.4
	少なすぎる	8	11.4	11.6	100.0
	合計	69	98.6	100.0	
欠損値	999	1	1.4		
合計		70	100.0		

χ^2検定を実施したところ、回答に5%水準で有意な差のあることがわかった；$\chi^2(4)=21.072, p=.000$。“多すぎる”あるいは“多い”と回答した学生は、69名中43名（71.7%）であった。留学先を個別にみてみると、特に“多すぎる”と回答しているのは、モナシュ（12名中7名、58.3%）；マセイ（23名中4名、17.3%）；クィーンズランド（9名中3名、33.3%）であった。逆に、“少ない”あるいは“少なすぎる”と回答しているのは、西オーストラリア（11名中1名、9.1%）；マセイ（23名中8名、34.8%）；キャンベラ（12名中5名、41.7%）；クィーンズランド（9名中1名、11.1%）であった。留学先により日本人の数に大きな差があることがわかった。

【留学先での課題の量】

Q. 留学先で出されていた課題の量はいかがでしたか。

表III-12. 留学先で出された宿題の量

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	多い	23	32.9	32.9	32.9
	どちらでもない	38	54.3	54.3	87.1
	少ない	9	12.9	12.9	100.0
	合計	70	100.0	100.0	

χ^2検定を実施したところ、回答に5%水準で有意な差のあることがわかった；$\chi^2(2)=18.029$, $p=.000$。“どちらでもない”と回答した学生は、70名中38名（54.3%）であった。留学先別にみてみると、モナシュ（12名中8名、66.7%）；西オーストラリア（11名中8名、72.7%）；マセイ（23名中13名、56.5%）；キャンベラ（12名中5名、41.7%）；クィーンズランド（10名中3名、30.0%）であった。“多かった”とする声も、モナシュ（12名中2名、16.7%）；西オーストラリア（11名中2名、18.2%）；マセイ（23名中8名、34.8%）；キャンベラ（12名中5名、41.7%）；クィーンズランド（10名中5名、50%）あった。逆に、“少ない”とする声は、モナシュ（12名中2名、16.7%）；西オーストラリア（11名中1名、9.1%）；マセイ（23名中2名、8.7%）；キャンベラ（12名中2名、16.7%）；クィーンズランド（10名中2名、20%）であった。負担になるほどではなかったがやや多め、という意味と理解した。

【留学先での課題の効果】

Q.　留学先で出されていた課題は、自分の英語力を伸ばす上で役に立ったと思いますか。

表III-13.　留学先での課題の効果

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	大いに役立った	16	22.9	22.9	22.9
	役に立った	45	64.3	64.3	87.1
	どちらでもない	6	8.6	8.6	95.7
	あまり役に立たなかった	2	2.9	2.9	98.6
	まったく役に立たなかった	1	1.4	1.4	100.0
	合計	70	100.0	100.0	

χ^2検定を実施したところ、回答に5%水準で有意な差のあることがわかった；$\chi^2(4)=95.857$, $p=.000$。“大いに役に立った”あるいは“役に立った”と回答している学生は、70名中61名（87.1%）であった。留学先で出された課題は、自身の英語力を鍛える上で役に立つものであったと評価していることがわかった。留学先別にみてみると、モナシュ（12名中9名、75.0%）；西オーストラリア（11名中10名、90.9%）；マセイ（23名中19名、82.6%）；キャンベラ（12名中12名、100%）；クィーンズランド（10名中9名、90.0%）であった。逆に、“あまり役に立たなかった”あるいは“まったく役に立たなかった”という回答もモナシュ（12名中1名、8.3%）；マセイ（23名中2名、8.7%）からあった。

〈現地での対人関係に関する質問〉

【ホストファミリー・ルームメートとの対人関係】

Q.　ホストファミリーやルームメイトとの間に何かトラブルはありましたか。

表III-14. ホストファミリーもしくはルームメイトとの対人関係

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	はい	21	30.0	30.0	30.0
	いいえ	49	70.0	70.0	100.0
	合計	70	100.0	100.0	

χ^2検定を実施したところ、回答に有意な差が認められた；$\chi^2(1)=11.200$, $p=.001$。ホストファミリーやルームメイトとの間に何らかのトラブルを経験した学生は有意に少ないことがわかった。ホストファミリーやルームメイトとの対人関係におけるトラブルはなかった、とする学生は70名中49名（70.0%）であった。中期ブリッジの場合、異文化期間が2か月と比較的短期間であるため、こうした結果になったものと思われる。しかし、逆に、ホストファミリーやルームメイトと対人関係上のトラブルがあったとする学生も70名中21名（30.0%）おり、1/3の学生がそうした経験をしていることを考えると、決して少なくはないといえよう。異文化において対人関係にまつわるトラブルは、ある程度避けられないもの、と覚悟すべきであろう。

【留学先に来ていた他国からの留学生との対人関係】

Q. 留学先に来ていた他国からの留学生との間に何かトラブルはありましたか。

表III-15. 他国の学生との対人関係

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	はい	9	12.9	13.0	13.0
	いいえ	60	85.7	87.0	100.0
	合計	69	98.6	100.0	
欠損値	999	1	1.4		
合計		70	100.0		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(1)=37.696$, $p=.000$。他の国々から留学先に来ている学生との間に何らかのトラブルを経験した学生は有意に少ないことがわかった。他国からの留学生と何らかのトラブルを経験している学生は、モナシュ（12名中4名、33.3%）；マセイ（23名中3名、13.0%）；キャンベラ（12名中2名、16.7%）であった。

【現地での日本人学生との対人関係】

Q. 現地で出会った日本人やいっしょに留学に行った梱山の学生との間に何かトラブルはありましたか。

表III-16. 他日本人留学生との対人関係

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	はい	12	17.1	17.1	17.1
	いいえ	58	82.9	82.9	100.0
	合計	70	100.0	100.0	

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(1)=30.229, p=.000$。他の日本人留学生や椙山からいっしょに行った仲間との間に何らかのトラブルを経験した学生の方が有意に少ないことがわかった。他の日本人や椙山からいっしょに行った仲間との間に何らかのトラブルを経験している学生は、モナシュ（12名中3名、25.0%）；西オーストラリア（11名中2名、18.2%）；マセイ（23名中4名、17.4%）；キャンベラ（12名中1名、8.3%）；クィーンズランド（10名中1名、10.0%）であった。

〈留学全般に関する質問〉

【留学の目的】

Q. この留学に求めていたものは何ですか。（複数回答）

表III-17. 留学の目的

		応答数		ケースのパーセント
		N	パーセント	
留学目的[a]	スピーキングの力を伸ばす	62	19.8%	88.6%
	リスニングの力を伸ばす	54	17.3%	77.1%
	リーディングの力を伸ばす	13	4.2%	18.6%
	ライティングの力を伸ばす	11	3.5%	15.7%
	文法力をしっかりと身につける	10	3.2%	14.3%
	語彙力を伸ばす	29	9.3%	41.4%
	異文化体験（つらいことも含め）	60	19.2%	85.7%
	観光をたっぷり楽しむ	15	4.8%	21.4%
	海外に友人や知り合いを作る	56	17.9%	80.0%
	その他	3	1.0%	4.3%
合計		313	100.0%	447.1%

a. グループ

回答数が全体の10%を超えているものをみてみると、英語力に関するものとしては、“スピーキング”“リスニング”の力を伸ばす、というものがあげられる。いわゆる“プラクティカル（実用）”な側面の英語力の増強が中期ブリッジに参加した学生の主な目的であることがわかった。また、“異文化体験”“海外に友人や知り合いを作る”といった経験の豊かさや人間関係の拡大を望んでの留学であることもわかる。

【日本や名古屋に関する知識不足の経験】

Q. 日本のことや名古屋のことをもっと知っておけばよかった、勉強しておけばよかった、と思うような経験を現地でしましたか。

表III-18. 日本や名古屋に関する知識不足を感じた経験の有無

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そういう経験をした	52	74.3	74.3	74.3
	そういう経験はしなかった	18	25.7	25.7	100.0
	合計	70	100.0	100.0	

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(1)=16.514, p=.000$。現地に行き、日本や名古屋に関する知識がなく恥ずかしい思いをした、という学生の方が、そうした経験をしなかった学生よりも有意に多いことがわかった。人数的には、70名中52名（74.3%）の学生がそうした経験をしており、非常に高い確率で、そうした場面に出会っていることがわかる。具体的には、モナシュ（12名中11名、91.7%）；西オーストラリア（11名中7名、63.6%）；マセイ（23名中16名、69.6%）；キャンベラ（12名中9名、75.0%）；クィーンズランド（10名中7名、70.0%）であった。

【留学にかかった費用に対する評価】

Q. 参加したプログラムにかかった費用についてどう思いますか。

表III-19. 留学にかかった費用

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	非常に高い	6	8.6	8.6	8.6
	高い	34	48.6	48.6	57.1
	どちらでもない	27	38.6	38.6	95.7
	安い	3	4.3	4.3	100.0
	合計	70	100.0	100.0	

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(3)=40.286, p=.000$。“非常に高い”あるいは“高い”といった評価を合わせると70名中40名（57.1%）である。また、2番目に多かった“どちらでもない”という回答は70名中27名（38.6%）であった。中期ブリッジは2か月の留学プログラムでもあり、中期留学ほどの金額はかからないにしても、ある程度の金額（学生が高いと感じる）がかかっていることがわかる。しかし、これはあくまでも実際にかかった費用に対しての印象であり、費用対効果の意味ではないと理解したい。

〈事前指導に関する評価〉

【先輩の体験談などの有用性】

Q.　全体での説明会や留学先別に個別の活動として行われた先輩からの体験談は、実際に現地で生活する上で役に立ちましたか。

表III-20.　先輩の体験談などの有効性

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	大いに役に立った	11	15.7	15.7	15.7
	役に立った	46	65.7	65.7	81.4
	どちらでもない	6	8.6	8.6	90.0
	あまり役に立たなかった	6	8.6	8.6	98.6
	まったく役に立たなかった	1	1.4	1.4	100.0
	合計	70	100.0	100.0	

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(4)=95.000, p=.000$。“大いに役に立った”あるいは“役に立った”といった評価を合わせると70名中57名（81.4%）となっている。中期ブリッジの説明会や留学シンポジウムなどで先輩たちから語られる体験談などは、次に出発する学生たちにとって、たいへん意味のあるものになっていることがわかった。

【JTB による旅行関係情報の有用性】

Q.　JTB 担当者からの旅行関係情報（保険、持ち物など）は役に立ちましたか。

表III-21.　旅行代理店からの情報の有効性

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	大いに役に立った	17	24.3	24.6	24.6
	役に立った	38	54.3	55.1	79.7
	どちらでもない	13	18.6	18.8	98.6
	あまり役に立たなかった	1	1.4	1.4	100.0
	合計	69	98.6	100.0	
欠損値	999	1	1.4		
合計		70	100.0		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(3)=41.319, p=.000$。“大いに役に立った”あるいは“役に立った”といった評価を合わせると70名中55名（78.6%）となっている。さまざまな機会をつうじ、情報の提供を旅行代理店（JTB）から行ってもらっているが、学生にとり、役に立つ情報の提供がきちんとなされていることがわかった。

【保護者会の有用性】

Q.　保護者会は、保護者の方の留学に対する理解を深めるのに役に立ちましたか。

表III-22.　保護者会の有効性

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	大いに役に立った	16	22.9	23.2	23.2
	役に立った	41	58.6	59.4	82.6
	どちらでもない	10	14.3	14.5	97.1
	あまり役に立たなかった	1	1.4	1.4	98.6
	参加しなかった	1	1.4	1.4	100.0
	合計	69	98.6	100.0	
欠損値	999	1	1.4		
合計		70	100.0		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(4)=78.754, p=.000$。“大いに役に立った”あるいは“役に立った”といった評価を合わせると69名中57名（82.6%）となっている。保護者会の実施は、中期ブリッジにおいても、親に留学を理解してもらう（親を説得する）ための有効な機会となっていることがわかった。

【危機管理セミナーの有用性】

Q.　昨年の６月中旬、モナシュ大学から櫻木真由美さんがお見えになり、女性の視点から、留学中の危機管理についてお話をしてくださいましたが、彼女の話は、実際に現地で生活する上で役に立ちましたか。

表III-23.　危機管理セミナーの有効性

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	大いに役に立った	8	11.4	11.9	11.9
	役に立った	29	41.4	43.3	55.2
	どちらでもない	20	28.6	29.9	85.1
	あまり役に立たなかった	1	1.4	1.5	86.6
	参加していない	9	12.9	13.4	100.0
	合計	67	95.7	100.0	
欠損値	999	3	4.3		
合計		70	100.0		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(4)=36.507, p=.000$。“大いに役に立った”あるいは“役に立った”といった評価を合わせると67名中37名（55.2%）となっている。その一方で、“どちらでもない”とする回答が2番目に多い結果となってい

る（67名中20名、29.9%）。モナシュ大学のMUELC (Monash University English Language Centre) に所属している櫻木真由美氏には、2か年（2010年度・2011年度）にわたり椙山女学園大学としての海外渡航における危機管理セミナーを実施してもらってきた。それ以前にも、国際コミュニケーション学部の講演会として2回（2008年度・2009年度）、海外生活における危機管理にかんする話をしてもらう機会を持っている。今回の結果を見てのとおり、学生からの評判・評価もたいへん高く、また取り上げる内容も、海外でたくさんの日本人学生のトラブルを目の当たりにしてきただけに、経験に裏打ちされた興味深い内容であった。しかし、内容的にはどちらかいえば異文化での長期滞在を意識した話が多かったため、“どちらでもない”とする回答が比較的多かったものと理解している。

【オリエンテーションや各留学先別に行われた勉強会の有用性】

Q. 全体でのオリエンテーションや留学先別の勉強会など（中期ブリッジでは、団結式なども含む）、出発までいろいろと行ってきましたが、その内容はいかがでしたか。

表III-24. オリエンテーションや勉強会の有効性

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	大いに役に立った	15	21.4	21.7	21.7
	役に立った	41	58.6	59.4	81.2
	どちらでもない	11	15.7	15.9	97.1
	あまり役に立たなかった	2	2.9	2.9	100.0
	合計	69	98.6	100.0	
欠損値	999	1	1.4		
合計		70	100.0		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(3)=48.739, p=.000$。“大いに役に立った”あるいは“役に立った”といった評価を合わせると69名中56名（81.2%）となっている。全体でのオリエンテーションや留学先ごとに実施している勉強会などは、それぞれ学生にとり有効な内容が提供されていることがわかった。その一方で、“あまり役に立たなかった”とする回答が、西オーストラリア（11名中2名、18.2%）にみられた。

【オリエンテーションや留学先別に行われた勉強会の回数に対する評価】

Q. オリエンテーションや留学先別の勉強会など（中期ブリッジでは、団結式なども含む）、の回数はいかがでしたか。

表III-25. オリエンテーションや勉強会の回数

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	多すぎる	2	2.9	2.9	2.9
	多い	2	2.9	2.9	5.8
	ちょうどいい	59	84.3	85.5	91.3
	少ない	3	4.3	4.3	95.7
	少なすぎる	3	4.3	4.3	100.0
	合計	69	98.6	100.0	
欠損値	999	1	1.4		
合計		70	100.0		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(4)=185.130$, $p=.000$。“多すぎる”あるいは“多い”とする回答は69名中4名（5.8%）、逆に“少ない”あるいは“少なすぎる”とする回答も69名中6名（8.7%）あった。“ちょうどいい”とする回答は69名中59名（85.5%）であり、こうした結果からも、全体でのオリエンテーションや留学先ごとに実施している勉強会などの回数は適当と判断していることがわかった。

〈留学パンフレットに対する評価〉

【オリエンテーションや留学先別に行われた勉強会の回数に対する評価】

Q. 学部主催の留学プログラムに関する情報は、『Studying Abroad Programs 20XX』に掲載されている内容で十分でしたか。

表III-26. 留学パンフレットの情報量

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	はい	58	82.9	84.1	84.1
	いいえ	11	15.7	15.9	100.0
	合計	69	98.6	100.0	
欠損値	999	1	1.4		
合計		70	100.0		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(1)=32.014$, $p=.000$。学部留学プログラムの内容がまとめられている『Studying Abroad Programs 20XX』に掲載されている内容は、現在、学生の求めている留学情報を十分に載せている、と評価していることがわかった。その一方で、『Studying Abroad Programs 20XX』に掲載されている内容は十分ではない、とする意見もモナシュ（12名中2名、16.7%）；西オーストラリア（11名中3名、27.2%）；マセイ（22名中2名、9.1%）；キャンベラ（12名中3名、25.0%）；クィーンズランド（10名中1名、10.0%）にみられた。

〈留学後の履修に関する質問〉

Q.　留学から帰国後、自分の英語力をはじめとし、英語圏で生活してきたことにより学び取った何かを失わないように、忘れないように普段努力をしていることはありますか。

表III-27.　留学で得た力を落とさないための努力の有無[1)]

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
	している	43	61.4	81.1	81.1
有効	していない	10	14.3	18.9	100.0
	合計	53	75.7	100.0	
	999	1	1.4		
欠損値	システム欠損値	16	22.9		
	合計	17	24.3		
合計		70	100.0		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(1)=20.547, p=.000$。中期ブリッジに参加した学生53名中43名（81.1%）が留学で得たものを維持すべく、帰国後も何らかの努力をしている、と回答している。その一方で、モナシュ（9名中2名、22.2%）・西オーストラリア（8名中2名、25.0%）・マセイ（17名中1名、5.9%）・キャンベラ（10名中2名、20.0%）・クィーンズランド（7名中2名、28.6%）から、そうした努力はしていない、という回答もみられた。

Q.　履修登録した科目で、留学から帰国したことを意識して登録した科目はありますか。

表III-28.　留学経験を意識した履修登録科目の有無[2)]

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
	ある	42	60.0	79.2	79.2
有効	ない	11	15.7	20.8	100.0
	合計	53	75.7	100.0	
	999	1	1.4		
欠損値	システム欠損値	16	22.9		
	合計	17	24.3		
合計		70	100.0		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(1)=18.132, p=.000$。中期ブリッジに参加した学生53名中42名（79.2%）が、留学から帰国したことを意識した履修

1) この質問項目は、2010年度学部留学プログラムの検証に用いられた質問用紙より加えられたものであるため、2009年度の学生は入っていない。

2) この質問項目は、2010年度学部留学プログラムの検証に用いられた質問用紙より加えられたものであるため、2009年度の学生は入っていない。

登録している、と回答している。その一方で、モナシュ（9名中2名、22.2%）；西オーストラリア（8名中2名、25.0%）；マセイ（17名中4名、23.5%）；キャンベラ（10名中1名、10.0%）；クィーンズランド（7名中2名、28.6%）は、そうした努力はしていない、という回答もみられた。

IV. J-SHINE（2011）のアンケート集計結果

ここからはJ-SHINEのみのアンケート集計結果を開示する。ただし、J-SHINEはバンクーバー（カナダ）にある専門学校のインターナショナルハウス1校のみへの留学であるため、プログラムの内的分析はできない。そのため、比較対象として他留学プログラムの結果を参照しながら、J-SHINEに参加した第1期生の回答結果を示したいと考える。本項で開示する集計データは、他留学プログラムの場合と同様、数量的に処理できる部分だけにとどめ、自由記述された回答については IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4 でテキスト分析を行ったうえで、本報告書の結果を踏まえ、別の機会に提示したいと考えている。

まず、プログラムの総合満足度を示す。次に、自身の英語力（自己評価）にかんする質問への回答結果を英語運用能力の区分ごとにみていく。本調査では、スピーキング・リスニング・リーディング・ライティングといった四技能に加え、文法力や語彙力についても、留学前と帰国後の2時点での自身の英語力を10段階で自己評価してもらった。また、留学中の英語学習への取り組みや、英語力を客観的に測る尺度として TOEIC を採用していることについても学生からの意見をきいている。

続いて、留学先（語学学校や専門学校）を10段階で総合評価してもらった。また、留学先の日本人の数や出された課題の量、その課題の効果の有無についてもきいている。さらに、留学中、現地での対人関係の状況を把握するため、1）ホストファミリーやルームメイト、2）他国からの留学生、3）椙山からいっしょに留学した仲間を含む対日本人学生といったケースに分け、質問している。

留学全般にかかわることとしては、1）留学の目的（複数回答可）、2）日本や名古屋にかんする知識不足を感じさせられた経験、3）留学にかかった金額などについて質問している。最後に、事前指導と留学から帰国後の自分自身の行動についてもきいている。具体的には、1）先輩からの体験談の有効性、2）旅行代理店からの情報の有効性、3）保護者会の有効性、4）大学主催の危機管理セミナーの有効性、5）オリエンテーションや勉強会の内容の良し悪しやその回数の適切性、6）留学パンフレットに掲載されていた内容の過不足、7）留学で得たものを失わないように自分自身が努力していること、8）帰国後に留学したことを意識し、登録した科目の有無などである。

こうした点をしっかりと把握しておくことで、学部で実施している各種留学プログラムの全体像を検証することが可能であり、検討すべき課題の存在も容易にみつけだすことができるものと考える。また、いかにそうした点を改善していくか、その方策を考えるヒントを提供してくれるものにもなりうると考える。

【参加留学プログラムの総合評価】

Q. 今回参加した留学プログラムの総合満足度（期間・かかった費用・留学先語学学校での授業内容や先生・ホストファミリーあるいは寮など、すべてを考慮）を 10 段階で評価してください。

表IV-2. 留学プログラム・留学先別総合満足度評価

	平均値	標準偏差
留学の総合満足度	8.55	1.368

（N=11）

他プログラムとの違いをみるために、ANOVA を実施したところ、プログラムの満足度に有意な差は認められなかった；$F(2, 161)=.751$, $p=.473$, *n.s.*, $\eta^2=.009$。留学プログラムとしての満足度は、他プログラムと同程度の評価であることがわかった。

〈英語力に関係する質問〉

【プログラム別・留学先別　留学前・留学後のスピーキング力（自己評価）】

Q. 留学前、あなたのスピーキング力はどれくらいであったと自己評価しますか。

Q. 帰国後の現在、あなたのスピーキング力はどれくらいであると自己評価しますか。

表IV-3. 留学前・留学後のスピーキング力（自己評価）とその伸長

	平均値	標準偏差
留学前スピーキング力	4.27	1.272
留学後スピーキング力	5.55	1.635
留学前後のスピーキングの伸長	1.27	1.794

（N=11）

他プログラムとしての違いをみるために、ANOVA を実施したところ、留学前の自身のスピーキング力に対する評価に有意な差は認められなかった；$F(2, 161)=2.352$, $p=.098$, *n.s.*, $\eta^2=.028$。しかし、帰国後のスピーキング力の評価には有意な差は認められた；$F(2, 161)=4.479$, $p=.013$, $\eta^2=.053$。この差を検証するために Tukey HSD 検定を実施したところ、中期留学と中期ブリッジ間に認められたものであり、J-SHINEとの間に有意な差は認められなかった（J-SHINE –中期留学：$p=.105$, *n.s.*, 95% Cl [-1.97, .14]；J-SHINE –中期ブリッジ：$p=.750$, *n.s.*, 95% Cl [-1.39, .74]）。留学前・帰国後の自身のスピーキング力に対する自己評価は、他留学プログラムに参加した学生と同程度であることがわかった。しかし、留学前–帰国後のスピーキング力の伸びには、5%水準で有意な差が認められた；$F(2, 161)=18.586$, $p=.000$, $\eta^2=.181$。また、Tukey HSD 検定を実施したところ、中期留学との間に有意な差のあることがわかっ

た (p=.000, 95% Cl [-2.26, -.87]) 。中期留学と比較して、留学前–帰国後の自身のスピーキング力に対する自己評価の伸びは有意に低いことがわかった。

【プログラム別・留学先別　留学前・留学後のリスニング力（自己評価）】

Q.　留学前、あなたのリスニング力はどれくらいであったと自己評価しますか。

Q.　帰国後の現在、あなたのリスニング力はどれくらいであると自己評価しますか。

表IV-4.　留学前・留学後のリスニング力（自己評価）とその伸長

	平均値	標準偏差
留学前リスニング力	5.36	.809
留学後リスニング力	6.27	1.555
留学前後のリスニングの伸長	.91	1.375

(N=11)

他プログラムとしての違いをみるために、ANOVA を実施したところ、留学前の自身のリスニング力に対する評価に有意な差が認められた ; $F(2, 161)=5.709$, $p=.004$, $\eta^2=.066$。Tukey HSD　検定を実施したところ、中期留学との間に有意な差のあることがわかった (p=.006, 95% Cl [.37, 2.60]) 。また、帰国後のリスニング力の自己評価にも有意な差が認められた ; $F(2, 161)=6.760$, $p=.002$, $\eta^2=.077$。しかし、Tukey HSD 検定を実施したところ、ここで示された差は中期留学と中期ブリッジ間に認められたものであり、J-SHINEとの間に有意な差は認められなかった (J-SHINE–中期留学 : p=.050, *n.s*, 95% Cl [-2.01, .00] ; J-SHINE–中期ブリッジ : p=.766, *n.s.*, 95% Cl [-1.31, .72])。留学前の自身のリスニング力に対する自己評価は、中期留学に参加した学生よりも有意に高い評価をしているが、帰国後は他留学プログラムと同程度の評価になっていることがわかった。そして、留学前–帰国後のリスニング力の伸びには、5%水準で有意な差が認められた ; $F(2, 161)=28.960$, $p=.000$, $\eta^2=.265$。Tukey HSD　検定を実施したところ、中期留学・中期ブリッジの両プログラムとの間に有意な差のあることがわかった (J-SHINE–中期留学 : p=.000, 95% Cl [-3.44, -1.54] ; J-SHINE–中期ブリッジ : p=.004, 95% Cl [-2.28, -.36]) 。中期留学・中期ブリッジと比較して、留学前–帰国後のリスニング力に対する自己評価の伸びが有意に低いことがわかった。

【プログラム別・留学先別　留学前・留学後のリーディング力（自己評価）】

Q.　留学前、あなたのリーディング力はどれくらいであったと自己評価しますか。

Q.　帰国後の現在、あなたのリーディング力はどれくらいであると自己評価しますか。

表IV-5.　留学前・留学後のリーディング力（自己評価）とその伸長

	平均値	標準偏差
留学前リーディング力	4.64	1.433
留学後リーディング力	5.55	1.508
留学前後のリーディングの伸長	.91	1.446

(N=11)

他プログラムとしての違いをみるために、ANOVA を実施したところ、留学前の自身のリーディング力に対する評価には有意な差は認められなかった；$F(2, 161)=2.375$, $p=.096$, $\eta^2=.029$。また、帰国後のリーディング力の自己評価にも有意な差は認められなかった；$F(2, 161)=2.059$, $p=.131$, $\eta^2=.025$。留学前・帰国後の自身のリーディング力に対する自己評価は、他留学プログラムに参加した学生たちと同程度であることがわかった。しかし、留学前–帰国後のリーディング力の伸びには、5%水準で有意な差が認められた；$F(2, 161)=10.143$, $p=.000$, $\eta^2=.112$。また、Tukey HSD 検定を実施したところ、中期留学との間に有意な差のあることがわかった (中期留学：$p=.004$, 95% Cl [-2.52, -.41]) 。中期留学と比較して、留学前–帰国後のリーディング力に対する自己評価の伸びが有意に低いことがわかった。

【プログラム別・留学先別　留学前・留学後のライティング力（自己評価）】

Q.　留学前、あなたのライティング力はどれくらいであったと自己評価しますか。

Q.　帰国後の現在、あなたのライティング力はどれくらいであると自己評価しますか。

表IV-6.　留学前・留学後のライティング力（自己評価）とその伸長

	平均値	標準偏差
留学前ライティング力	4.36	1.433
留学後ライティング力	5.36	2.014
留学前後のライティングの伸長	1.00	1.673

(N=11)

他プログラムとしての違いをみるために、ANOVA を実施したところ、留学前の自身のライティング力に対する評価に有意な差が認められた；$F(2, 161)=5.671$, $p=.004$, $\eta^2=.066$。この差を検証するために Tukey HSD 検定を実施したところ、中期留学と中期ブリッジ間に認められたものであり、J-SHINEとの間に有意な差は認められなかった（J-SHINE–中期留学：$p=.480$, *n.s.*, 95% Cl [-.57, 1.66]；（J-SHINE–中期ブリッジ：$p=.858$, *n.s.*, 95% Cl [-1.37, .87]）。また、帰国後のライティング力の自己評価においてもプログラム間で有意な差は認められなかった；$F(2, 161)=2.431$, $p=.091$, $\eta^2=.029$。留学前・帰国後の自身のライティング力に対する自己評価は、他留学プログラムに参加した学生たちと同程度であることがわかった。しかし、留学前–帰国後のライティング力の伸びには、5%水準で有意な差が認められた；$F(2, 161)=12.438$, $p=.000$, $\eta^2=.134$。また、Tukey HSD 検定を実施したところ、中期留学との間に有意な差のあることがわかった (中期留学：$p=.001$, 95% Cl [-2.63, -.53]) 。中期留学と比較して、留学前–帰国後のライティング力の自己評価の伸びが有意に低いことがわかった。

【プログラム別・留学先別　留学前・留学後の文法力（自己評価）】

Q.　留学前、あなたの文法力はどれくらいであったと自己評価しますか。

Q.　帰国後の現在、あなたの文法力はどれくらいであると自己評価しますか。

表IV-7. 留学前・留学後の文法力（自己評価）とその伸長

	平均値	標準偏差
留学前文法力	4.45	1.368
留学後文法力	5.00	1.612
留学前後の文法力の伸長	.91	1.221

(N=11)

他プログラムとしての違いをみるために、ANOVA を実施したところ、留学前の自身の文法力に対する評価に、プログラム間の有意な差は認められなかった；$F(2, 161)=.362$, $p=.697$, $\eta^2=.004$。しかし、帰国後の文法力の自己評価には有意な差が認められた；$F(2, 161)=5.488$, $p=.005$, $\eta^2=.064$。この差を検証するために Tukey HSD 検定を実施したところ、中期留学・中期ブリッジとの間に有意な差のあることがわかった、(J-SHINE–中期留学：$p=.004$, 95% Cl [-2.62, -.42]；J-SHINE–中期ブリッジ：$p=.032$, 95% Cl [-2.31, -.09]) 。留学前の自身の文法力に対する自己評価は、他留学プログラムに参加した学生たちと同程度であることがわかった。帰国後の自身の文法力への評価は、有意に低いことがわかった。留学前–帰国後の文法力の伸びには、5%水準でプログラム間に有意な差が認められた；$F(2, 161)=5.542$, $p=.005$, $\eta^2=.064$。また、Tukey HSD 検定を実施したところ、中期留学との間に有意な差のあることがわかった (中期留学：$p=.027$, 95% Cl [-1.90, -.09]) 。中期留学と比較して、留学前–帰国後の文法力に対する自己評価の伸びは有意に低いことがわかった。

【プログラム別・留学先別　留学前・留学後の語彙力（自己評価）】

Q. 留学前、あなたの語彙力はどれくらいであったと自己評価しますか。

Q. 帰国後の現在、あなたの語彙力はどれくらいであると自己評価しますか。

表IV-8. 留学前・留学後の語彙力（自己評価）とその伸長

	平均値	標準偏差
留学前語彙力	4.09	1.221
留学後語彙力	5.18	1.328
留学前後の語彙力の伸長	.91	1.514

(N=11)

他プログラムとしての違いをみるために、ANOVA を実施したところ、留学前の自身の語彙力に対する評価に有意な差は認められなかった；$F(2, 161)=1.772$, $p=.173$, $\eta^2=.022$。また、帰国後の語彙力の自己評価にも有意な差は認められなかった；$F(2, 161)=2.558$, $p=.081$, $\eta^2=.031$。留学前・帰国後の自身の語彙力に対する評価は、他プログラムに参加した学生と同程度であることがわかった。しかし、留学前–帰国後の語彙力の伸びには、5%水準で有意な差が認められた；$F(2, 161)=10110$, $p=.000$, $\eta^2=.112$。この差を検証するために Tukey HSD 検定を実施したところ、中期留学との間に有意な差のあることがわかった (中期留学：$p=.001$, 95% Cl [-2.66, -.61]) 。中期留学と比較して、留学前–帰国後の語彙力に対する自己評

価の伸びは有意に低いことがわかった。

【留学期間中の英語学習への取り組み】

Q. あなたの留学期間中の英語学習への取り組みを 10 段階で評価してください。

表IV-9. 留学期間中の英語学習への取り組み

	平均値	標準偏差
自身の英語への取り組み評価	7.18	1.537

(N=11)

プログラムとしての違いをみるために、ANOVA を実施したところ、留学期間中の自身の英語学習への取り組みに対する自己評価に有意な差は認められなかった；$F(2, 161)=.137$, $p=.872$, $\eta^2=.002$。留学期間中の自身の英語学習への取り組み方は、他留学プログラムに参加した学生と同程度の自己評価であることがわかった。

【TOEIC の利用についての評価】

Q. 現在、留学の成果として、英語力の測定に TOEIC を利用していますが、適切だと思いますか。

表IV-10. 留学の成果としての英語力測定にTOEICを利用することの適切性

	観測度数 N	期待度数 N	残差
適切だと思う	1	2.8	-1.8
どちらかといえば適切だと思う	6	2.8	3.3
どちらでもない	2	2.8	-.8
あまり適切だとは思わない	2	2.8	-.8
合計	11		

χ^2検定を実施したところ、回答に有意な差は認められなかった；$\chi^2(3)=5.364$, $p=.147$, *n.s.*。J-SHINEは帰国後の TOEIC 受験を課していないため、こうした結果になったものと考える。統計的な有意差は認められなかったが、数値として“適切だと思う”あるいは“どちらかといえば適切だと思う”といった英語力の測定に TOEIC を利用することに対して肯定的に受け止めている学生は、11名中7名（63.6%）おり、英語力の測定に TOEIC を利用することに対して肯定的に受け止めている、と思われる。

〈留学先の評価〉

【留学先への満足度】

Q. 留学先への総合評価・満足度はどれくらいですか。（10 段階評価）

表IV-11. 留学先への満足度（10段階評価）

	平均値	標準偏差
学校への満足度	8.45	1.036

他プログラムとしての違いをみるために、ANOVA を実施したところ、留学先への満足度にプログラム間で有意な差は認められなかった；$F(2, 161)=1.622, p=.201, \eta^2=.020$。留学先に対しては他プログラムと同程度の評価をしていることがわかった。

【日本人の数】

Q. 留学先にいた日本人の数に対して、どのように感じましたか。

表IV-12. 留学先にいた日本人の数

	観測度数 *N*	期待度数 *N*	残差
多すぎる	1	2.8	-1.8
多い	7	2.8	4.3
どちらでもない	2	2.8	-.8
少ない	1	2.8	-1.8
合計	11		

χ^2検定を実施したところ、回答に5%水準で有意な差のあることがわかった；$\chi^2(3)=9.000, p=.029$。“多すぎる”あるいは“多い”と回答した学生は、11名中8名（72.7%）であった。J-SHINEは日本の小学校で英語指導する資格を取得する留学でもあり、当然のことながら、インターナショナルハウスに留学してくるのは日本人だけ、ということであろう。

【留学先での課題の量】

Q. 留学先で出されていた課題の量はいかがでしたか。

表IV-13. 留学先で出されていた課題の量

	観測度数 *N*	期待度数 *N*	残差
どちらでもない	6	3.7	2.3
少ない	4	3.7	.3
少なすぎる	1	3.7	-2.7
合計	11		

χ^2検定を実施したところ、回答に有意な差は認められなかった；$\chi^2(2)=3.455, p=.178$, *n.s.*。回答が“どちらでもない”から“少なすぎる”に分布していることから、中期留学や中期ブリッジのような語学学校への言語習得および強化を目的とした留学と比べて、J-SHINEは課題が少なめであったことがわかる。

【留学先での課題の効果】

Q.　留学先で出されていた課題は、自分の英語力を伸ばす上で役に立ったと思いますか。

表IV-14.　留学先での課題の効果

	観測度数 *N*	期待度数 *N*	残差
役に立った	9	5.5	3.5
どちらでもない	2	5.5	-3.5
合計	11		

χ^2検定を実施したところ、回答に5%水準で有意な差のあることがわかった；$\chi^2(1)=4.455$, $p=.035$。“役に立った”と回答している学生は、11名中9名（81.8%）となっている。課題そのもの量は少なめであったが、自身の英語力を鍛える上では役に立つものであったと評価していることがわかった。

〈現地での対人関係に関する質問〉

【ホストファミリー・ルームメートとの対人関係】

Q.　ホストファミリーやルームメイトとの間に何かトラブルはありましたか。

表IV-15.　ホストファミリーもしくはルームメイトとの対人関係

	観測度数 *N*	期待度数 *N*	残差
はい	2	5.5	-3.5
いいえ	9	5.5	3.5
合計	11		

χ^2検定を実施したところ、回答に有意な差が認められた；$\chi^2(1)=4.455$, $p=.035$。ホストファミリーやルームメイトとの間に何らかのトラブルを経験した学生は有意に少ないことがわかった。ホストファミリーやルームメイトとの対人関係におけるトラブルはなかった、とする学生は11名中9名（81.8%）であった。J-SHINEの場合、異文化期間が4-6週間と比較的短期間であるため、こうした結果になったものと思われる。しかし、逆に、これだけ短期であるにも関わらず、ホストファミリーやルームメイトと対人関係上のトラブルがあったとする学生も11名中2名（18.2%）おり、異文化において対人関係にまつわるトラブルは避けられないもの、と覚悟しておくべきであると思われる。

【留学先に来ていた他国からの留学生との対人関係】

Q.　留学先に来ていた他国からの留学生との間に何かトラブルはありましたか。

表IV-16.　他国の学生との対人関係

	観測度数 *N*	期待度数 *N*	残差
いいえ	11	11.0	.0
合計	11[a]		

a. この変数は一定です。カイ 2 乗検定は実行できません。

J-SHINEはプログラムの性質上、留学先には日本人だけしかおらず、他国からの留学生との接点はないため、こうした結果になったものと判断される。

【現地での日本人学生との対人関係】

Q.　現地で出会った日本人やいっしょに留学に行った椙山の学生との間に何かトラブルはありましたか。

表IV-17.　他日本人留学生との対人関係

	観測度数 *N*	期待度数 *N*	残差
いいえ	11	11.0	.0
合計	11[a]		

a. この変数は一定です。カイ 2 乗検定は実行できません。

J-SHINEはプログラムの性質上、留学先には日本人だけしかおらず、かつ留学期間が4-6週間と短期間であるため、こうした結果になったものと判断される。

〈留学全般に関する質問〉

【留学の目的】

Q.　この留学に求めていたものは何ですか。(複数回答)

表IV-18.　留学の目的

		応答数		ケースのパーセント
		N	パーセント	
留学目的[a]	スピーキングの力を伸ばす	8	16.7%	72.7%
	リスニングの力を伸ばす	7	14.6%	63.6%
	リーディングの力を伸ばす	2	4.2%	18.2%
	ライティングの力を伸ばす	2	4.2%	18.2%
	文法力をしっかりと身につける	1	2.1%	9.1%
	語彙力を伸ばす	3	6.3%	27.3%
	異文化体験（つらいことも含め）	9	18.8%	81.8%
	観光をたっぷり楽しむ	6	12.5%	54.5%
	海外に友人や知り合いを作る	5	10.4%	45.5%
	その他	5	10.4%	45.5%
合計		48	100.0%	436.4%

a. グループ

回答数が全体の10%を超えているものをみてみると、英語力に関係するものとしては、“スピーキング”“リスニング”の力を伸ばす、というものがあげられる。いわゆる“プラクティカル（実用）”な側面の英語力の増強を目的とするのは、他留学プログラムと同様といえる。しかし、J-SHINEの場合、英語そのものの強化を目指す中期留学や中期ブリッジと留学の質が異なり、基本的にある程度（以上）の英語力のある者が、その英語力を使って資格を取得する留学であるため、本調査の英語力（自己評価）にかんする質問項目の結果をみてのとおり、英語力がついた、英語力が伸びた、といった感触が少ないところと結びついていると考えられる。また、“異文化体験”“観光を楽しむ”“海外に友人や知り合いを作る”といった経験の豊かさや人間関係の拡大を望んでいるところも他プログラムと同様である。ただ、“観光”の側面がこれだけ強調されるのは、留学期間が短期であるがゆえのものと思われる。J-SHINEらしい側面としては、“その他”として、“資格の取得”があげられている点である。

【日本や名古屋に関する知識不足の経験】

Q. 日本のことや名古屋のことをもっと知っておけばよかった、勉強しておけばよかった、と思うような経験を現地でしましたか。

表IV-19. 日本や名古屋に関する知識不足を感じた経験の有無

	観測度数 *N*	期待度数 *N*	残差
そういう経験をした	4	5.5	-1.5
そういう経験はしなかった	7	5.5	1.5
合計	11		

χ^2検定を実施したところ、回答に有意な差は確認されなかった；$\chi^2(1)=.818$, $p=.366$, *n.s.*。現地に行き、日本や名古屋に関する知識がなく、恥ずかしい思いをした、という学生も、そうした経験はしなかった学生も、その間に差はない、ということである。これはJ-SHINEの性質上、留学先には日本人だけしかおらず、ホームステイ先でそうした話題が出ない限り、そのような場面に遭遇することはないことになる。加えて、留学期間が4-6週間と短期間であることも、そうした機会に恵まれることが他プログラムと比べてより少ない、ということになろう。

【留学にかかった費用に対する評価】

Q. 参加したプログラムにかかった費用についてどう思いますか。

表IV-20. 留学にかかった費用

	観測度数 *N*	期待度数 *N*	残差
高い	3	3.7	-.7
どちらでもない	5	3.7	1.3
安い	3	3.7	-.7
合計	11		

χ^2検定を実施したところ、回答に有意な差は認められなかった；$\chi^2(2)=.727$, $p=.695$, *n.s.*。統計的には回答状況に有意な差はない、という結果であったが、数値的には“どちらでもない”あるいは“安い”と回答している学生が11名中8名（72.7%）おり、留学期間が短期であることもあり、金額的に決して高くないプログラムである、とみることができる。

〈事前指導に関する評価〉

【先輩の体験談などの有用性】

Q. 全体での説明会や留学先別に個別の活動として行われた先輩からの体験談は、実際に現地で生活する上で役に立ちましたか。

表IV-21. 先輩の体験談などの有効性

	観測度数 *N*	期待度数 *N*	残差
大いに役に立った	2	3.7	-1.7
役に立った	6	3.7	2.3
どちらでもない	3	3.7	-.7
合計	11		

χ^2検定を実施したところ、回答に有意な差は認められなかった；$\chi^2(2)=2.364$, $p=.307$, *n.s.*。統計的には回答状況に有意な差はない、という結果であったが、数値的には“大いに役に立った”あるいは“役に立った”といった肯定的な評価を合わせると11名中8名（72.7%）となっている。J-SHINEの説明会で担当者から説明されることや留学シンポジウムなどで先輩たちから語られる体験談などは、これから留学に出発する学生たちにとって、意味のあるものになっていることがわかる。

【JTB による旅行関係情報の有用性】

Q. JTB 担当者からの旅行関係情報（保険、持ち物など）は役に立ちましたか。

表IV-22. 旅行代理店からの情報の有効性

	観測度数 *N*	期待度数 *N*	残差
大いに役に立った	2	3.7	-1.7
役に立った	8	3.7	4.3
どちらでもない	1	3.7	-2.7
合計	11		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(2)=7.818$, $p=.020$。“大いに役に立った”あるいは“役に立った”といった肯定的な評価を合わせると11名中10名（90.9%）である。旅行代理店から提供される情報は、学生にとり、役に立つものになっていることがわかる。

【保護者会の有用性】

Q. 保護者会は、保護者の方の留学に対する理解を深めるのに役に立ちましたか。

表IV-23. 保護者会の有効性

	観測度数 *N*	期待度数 *N*	残差
大いに役に立った	1	3.7	-2.7
役に立った	8	3.7	4.3
どちらでもない	2	3.7	-1.7
合計	11		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(2)=7.818, p=.020$。“大いに役に立った”あるいは“役に立った”といった肯定的な評価を合わせると11名中9名（81.8%）である。保護者会の実施は、J-SHINE においても、親に留学を理解してもらう（親を説得する）ための有効な機会となっていることがわかった。

【危機管理セミナーの有用性】

Q. 昨年の６月中旬、モナシュ大学から櫻木真由美さんがお見えになり、女性の視点から、留学中の危機管理についてお話をしてくださいましたが、彼女の話は、実際に現地で生活する上で役に立ちましたか。

表IV-24. 危機管理セミナーの有効性

	観測度数 *N*	期待度数 *N*	残差
役に立った	4	3.7	.3
どちらでもない	1	3.7	-2.7
参加していない	6	3.7	2.3
合計	11		

χ^2検定を実施したところ、回答に有意な差は認められなかった、$\chi^2(2)=3.455, p=.178$, *n.s.*。モナシュ大学のMUELC (Monash University English Language Centre) に所属している櫻木真由美氏には、2か年（2010年度・2011年度）にわたり椙山女学園大学としての海外渡航における危機管理セミナーを実施してもらってきた。それ以前にも、国際コミュニケーション学部の講演会として2回（2008年度・2009年度）、海外生活における危機管理にかんする話をしてもらう機会を持っている。今回の結果を見てのとおり、学生からの評判・評価もたいへん高く、また取り上げる内容も、海外でたくさんの日本人学生のトラブルを目の当たりにしてきただけに、経験に裏打ちされた興味深い内容であった。しかし、J-SHINE の学生でこうした危機管理セミナーに参加しているのは11名中5名（45.5%）であり、半数以上が参加していない、という結果であった（11名中6名、54.5%）。

【オリエンテーションや各留学先別に行われた勉強会の有用性】

Q. 全体でのオリエンテーションや留学先別の勉強会など（中期ブリッジでは、団結式なども含む）、出発までいろいろと行ってきましたが、その内容はいかがでしたか。

表IV-25. オリエンテーションや勉強会の有効性

	観測度数 *N*	期待度数 *N*	残差
大いに役に立った	1	3.3	-2.3
役に立った	7	3.3	3.7
あまり役に立たなかった	2	3.3	-1.3
合計	10		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた；$\chi^2(2)=6.200, p=.045$。“大いに役に立った”あるいは“役に立った”といった評価を合わせると11名中8名（72.7%）となっている。全体でのオリエンテーションや勉強会などは、学生にとり有効な内容が提供されていることがわかった。

【オリエンテーションや留学先別に行われた勉強会の回数に対する評価】

Q. オリエンテーションや留学先別の勉強会など（中期ブリッジでは、団結式なども含む）、の回数はいかがでしたか。

表IV-26. オリエンテーションや勉強会の回数

	観測度数 *N*	期待度数 *N*	残差
多すぎる	2	3.3	-1.3
多い	1	3.3	-2.3
ちょうどいい	7	3.3	3.7
合計	10		

χ^2検定を実施したところ、5%水準で回答に有意な差がみられた、$\chi^2(4)=6.200, p=.045$。“ちょうどいい”とする回答は11名中7名（63.6%）で最多であった。しかし、3名（27.2%）の学生からは“多すぎる”あるいは“多い”とする声も聞かれた。こうした結果からも、全体でのオリエンテーションや勉強会などの回数は適量と判断していることがわかった。

〈留学パンフレットに対する評価〉

【オリエンテーションや留学先別に行われた勉強会の回数に対する評価】

Q. 学部主催の留学プログラムに関する情報は、『Studying Abroad Programs 20XX』に掲載されている内容で十分でしたか。

表IV-27. 留学パンフレットの情報量

	観測度数 *N*	期待度数 *N*	残差
はい	7	4.5	2.5
いいえ	2	4.5	-2.5
合計	9		

χ^2検定を実施したところ、回答に有意な差は認められなかった、$\chi^2(1)=2.778$, $p=.096$, *n.s.*。統計上、回答状況に有意な差はない、という結果であったが、数値的には“はい”と回答した学生が11名中7名（63.6%）おり、学部留学プログラムの内容がまとめられている『Studying Abroad Programs 20XX』に掲載されている内容は、現在、学生の求めている留学情報を十分に載せている、と評価していることがわかった。

〈留学後の履修に関する質問〉

Q. 留学から帰国後、自分の英語力をはじめとし、英語圏で生活してきたことにより学び取った何かを失わないように、忘れないように普段努力をしていることはありますか。

表IV-28. 留学で得た力を落とさないための努力の有無

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	している	7	63.6	70.0	70.0
	していない	3	27.3	30.0	100.0
	合計	10	90.9	100.0	
欠損値	999	1	9.1		
合計		11	100.0		

χ^2検定を実施したところ、回答に有意な差は認められなかった、$\chi^2(1)=1.600$, $p=.206$, *n.s.*。11名中7名（63.6%）留学で得たものを維持すべく、帰国後も何らかの努力をしている、と回答している。

Q. 履修登録した科目で、留学から帰国したことを意識して登録した科目はありますか。

表IV-29. 留学経験を意識した履修登録科目の有無

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	ある	3	27.3	30.0	30.0
	ない	7	63.6	70.0	100.0
	合計	10	90.9	100.0	
欠損値	999	1	9.1		
合計		11	100.0		

χ^2検定を実施したところ、回答に有意な差は認められなかった、$\chi^2(1)=1.600$, $p=.206$, *n.s.*。11名中7名（63.6%）が留学から帰国したことを意識した履修登録していない、と回答している。

おわりに

本報告は、2009年度から2011年度の3か年にわたり中期留学と中期ブリッジに参加した学生に実施してきたアンケートと2011年度初めて第1期生を送り出したJ-SHINEに参加した学生のアンケートをプログラムごとに集計したものである。ただし、本報告は数量的に処理できる質問部分に限って集計した。自由記述項目にかんしては、テキストデータマイニング用の専用ソフト（IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4）で処理したうえで別の機会に提示したいと考えている。

今回の調査結果を横断的に概観してみると、「異文化滞在期間のちがい」がひとつ重要な要素であることがわかる。留学プログラムへの総合満足度は留学期間が長ければ長いほど、満足度が低くなる傾向がみられる（中期留学7.99；中期ブリッジ8.12；J-SHINE8.55）。しかし、ANOVAを実施した結果、留学プログラム間の満足度に有意な差は認められなかった；$F(2, 161)=.751, p=.473, n.s., \eta^2=.009$。つまり、どの留学先グループも総合満足度としては同様の評価をしている、ということである。

英語力の自己評価にかんしても、留学期間が長ければ長いほど、帰国後、自身の英語力に対する自己評価が高くなる傾向がみられた。帰国後、スピーキング力・リスニング力・リーディング力・ライティング力・文法力・語彙力のすべての自己評価において、留学期間の最も長い中期留学と他の2つのプログラムの間で有意な差が確認されている。また、留学前–帰国後の自己評価の伸びにかんしても、同様の点が指摘できる。留学期間の最も長い6-7か月間の中期留学、2か月間の中期ブリッジ、4-6週間のJ-SHINEの順で留学前–帰国後の自己評価の伸びがだんだんと小さくなっている。また、プログラム間の有意差も中期留学と他の2つのプログラムの間に生じていることがわかる。ただし、リスニングにかんしては、中期ブリッジとJ-SHINEの間にも有意な差が生じている。

留学先（語学学校・専門学校）への満足度も、留学期間が長くなればなるほど、満足度が低くなる傾向がみられた（中期留学7.47；中期ブリッジ7.78；J-SHINE8.45）。しかし、ANOVAを実施したところ、留学プログラム間の満足度に有意な差は認められなかった；$F(2, 161)=1.622, p=.201, n.s., \eta^2=.020$。つまり、どのグループも留学先に対し、同様の評価をしている、ということである。

対人関係においても、異文化滞在期間のちがいが重要な要素となっていることがわかる。留学期間の長さとホスト国の人との対人関係のトラブル経験者数が連動していることがみてとれる。3つのプログラムの中で最も長期の中期留学から最も短期のJ-SHINEの順で、ホスト国の人とのトラブル発生件数がだんだんと少なくなっている（中期留学82名中33件［40.2%］；中期ブリッジ70名中21件［30.0%］；J-SHINE11名中2件［18.2%］）。しかし、他国からの留学生や同じ日本人同士の対人関係上のトラブル発生件数は、このパターンにあてはまらない。

「日本や名古屋、あるいは自分の住む地域のことをよく知らず、恥ずかしい思いをした経験」も滞在期間と正の相関がうかがえた。「そうした経験をした」と回答した学生の数が

中期留学・中期ブリッジ・J-SHINE の順で、長期から短期に向かって少なくなっていっているのである(中期留学 83 名中 72 件[86.7%];中期ブリッジ 70 名中 52 件[74.3%];J-SHINE11 名中 4 件 [36.4%])。

事前指導の一環として実施している「危機管理セミナー」の評価も異文化滞在期間が長いプログラムほど良い評価をしている傾向がある。“大いに役に立った”あるいは“役に立った”と回答した学生の数は、中期留学 82 名中 67 名 (81.7%) ;中期ブリッジ 67 名中 37 名 (55.2%) ;J-SHINE11 名中 6 名 (54.5%) であった。「危機管理セミナー」でとりあげる内容にもよるものと思われるが、2010 年度・2011 年度はモナシュ大学の MUELC (Monash University English Language Centre) に所属している櫻木真由美氏によるものであった。女性の目線から、異文化で生活する上での危機管理について語っていただき、非常に好評ではあった。ただ、概して長期滞在者向けの内容であったかもしれない。

次に横断的に類似している点として、留学の目的があげられる。どの留学プログラムも学生たちが留学に掲げている目的がきわめて重なりあっていることがわかる。3 プログラムとも共通しているものとして、英語関連のものでは、「スピーキング力を伸ばす (中期留学 18.2% ; 中期ブリッジ 19.8% ; J-SHINE16.7%)」「リスニング力を伸ばす (中期留学 15.7% ; 中期ブリッジ 17.3% ; J-SHINE14.6%)」といったものがあげられる。英語力にかんしてはスピーキング・リスニングといったプラクティカルな側面の強化を目的としていることがわかる。しかし、2 か月の中期ブリッジ・4-6 週間の J-SHINE といった比較的短期のプログラムでは、留学前–帰国後の英語力 (自己評価) の伸びにかんして、どの側面をとりあげてみても有意な差は確認されていない。また、経験の豊かさや人間関係の側面として、「異文化体験 (つらいことも含め) (中期留学 17.1% ; 中期ブリッジ 19.2% ; J-SHINE18.8%」「海外に友人を作る (中期留学 15.3% ; 中期ブリッジ 17.9% ; J-SHINE10.4%)」といったものがあげられている。

今回、個別項目の集計結果をうけ、どのような議論がなされるかは各留学プログラム担当者に任せたいと思う。それぞれの留学プログラムがより良い方向に発展していく、そのきっかけとなるものとして本報告を利用していただければ幸いである。

引用文献

笠原正秀 (2011) 2010 年度中期ブリッジ・中期留学アンケート調査結果『2010 年度椙山女学園大学学園研究費 (C)「海外留学事前事後指導の基礎研究」研究報告書』(pp.1-41).

SPACE ALK きっず英語 (2013) 小学校英語指導者資格ってどんな資格？Retrieved from http://www.alc.co.jp/kid/naritai/naru/saiyo/shikaku4.html

J-SHINE 特定非営利活動法人 小学校英語指導者認定協議会 (2013) J-SHINE とは？はじめに Retrieved from http://www.j-shine.org/whats.html

［資料 1］

国際コミュニケーション学部各種留学プログラム（英語圏）に関するアンケート

国際コミュニケーション学部が創設され 10 年目を迎えました。また、中期留学は、本年度出発する中期留学生が第 11 期生めとなります。中期ブリッジ・プログラムも軌道に乗り、昨年度末からは小学校英語指導者資格取得のための留学、J-SHINE が始まりました。毎年、さまざまな留学プログラムをとおして学生たちを海外に送り出すようになりました。そうした学部として節目の年にあたり、学部主体で行っている各種留学プログラム（英語圏）の現状の把握と検証、そして今後の発展に向けての検討を目的としたアンケートを実施いたします。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

本アンケートを通じて、各プログラムあるいは各留学先学校に対する、満足度や到達感、場合によっては改変の必要のある個所などを知り、また留学前に受けた事前指導（留学先別勉強会・講演会・セミナー、等々）や留学後（帰国後）の事後の指導（単位認定のための面接、等々）の有効性やあり方、また留学期間中、あなたが現地で体験したことや経験したこと、あるいは日本にいる窓口教員とのやりとりなど、思うこと、思ったことを遠慮なくフィードバックしていただきたいと思います。

本アンケートの構成は、以下の通りです。最初に、基礎質問として、あなたの回答を統計的に処理・分析するための質問をします。この個所は、既述のとおり、データ処理上、非常に大切な質問となりますので、くれぐれも記入漏れのないようにお願いします。次に、あなたの英語力に関する質問をします。ここでの質問は、あくまでもあなたの「自己評価」ですので、実際のあなたの英語力とはまったく関係がありません。自分自身が判断する（思う）通りに答えてください。3 点目にあなたが留学した学校に関することをききます。現地で、あなたが実際に体験し、あなたの目で見てきたことを思い出しながら回答してください。4 点目は、今回の留学そのものについて質問します。5 点目は、留学中あなたを取り囲んでいた人間関係について質問します。現地の人々（ホストファミリー、語学学校の先生、等々）との関係、日本人以外の留学生との関係、日本人同士（日本からの留学生）の関係、椙山から留学した仲間との関係など、留学期間中、あなたの周囲で起こった人間関係についておきかせください。6 点目は、留学に出発する前段階でやっておくべきこと、やっておいたらよかったということ、これから留学に出発する人たちへのアドバイス、という観点からいくつか質問します。最後に、今回の留学に出発する前に行われたガイダンス、留学先別の勉強会、説明会、講演会などの事前指導、帰国後に行われた事後の指導について質問します。以上の 6 つ観点から、あなたの留学を振り返りながら回答していただきたいと思います。

このアンケートは統計的に処理されます。個人を特定したりするために使われるものではありません。あなたの体験してきたことや見てきたことを正確にフィードバックしてもらうために、正直にありのままを答えてください。よろしくお願いします。

【基礎質問】

以下の質問にお答えください。

1. あなたの年齢をお答えください。具体的に年齢を記してください。

（　　才）

2. 今回の留学に出発した時のあなたの年齢をお答えください。具体的に年齢を記してください。

（　　才）

3. あなたの留学先をお答えください。具体的な国名、大学名を記してください。

（国名：　　）

（学校名：　　）

4. あなたが利用した留学プログラムをお答えください。該当する方に◯をつけてください。

（1. 中期ブリッジ［2か月］　2. 中期留学［6—7か月］　3. J-SHINE［4—6週間］）

5. 今回の留学の総合満足度（期間・かかった金額・留学先学校での授業内容や先生・ホストファミリーなど、留学に関わるすべてのことを考慮して）はどれくらいですか。10 段階評価で回答してください。該当する評価に◯をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

5-1）5.の質問であなたがつけた評価（減点あるいは加点）の理由はどういうところにありますか。具体的に記してください。

【英語力に関する質問】

I. あなたの英語力について質問します。

1-1）留学前のあなたのスピーキングの力はどのくらいであったと自己評価しますか。10 段階評価で回答してください。該当する評価に◯をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

1-2) 現在のあなたのスピーキングの力はどれくらいだと自己評価しますか。10 段階評価で回答してください。該当する評価に◯をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

2-1) 留学前のあなたのリスニングの力はどのくらいであったと自己評価しますか。10 段階評価で回答してください。該当する評価に◯をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

2-2) 現在のあなたのリスニングの力はどれくらいだと自己評価しますか。10 段階評価で回答してください。該当する評価に◯をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

3-1) 留学前のあなたのリーディングの力はどのくらいであったと自己評価しますか。10 段階評価で回答してください。該当する評価に◯をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

3-2) 現在のあなたのリーディングの力はどれくらいだと自己評価しますか。10 段階評価で回答してください。該当する評価に◯をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

4-1) 留学前のあなたのライティングの力はどのくらいであったと自己評価しますか。10 段階評価で回答してください。該当する評価に◯をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

4-2) 現在のあなたのライティングの力はどれくらいだと自己評価しますか。10 段階評価で回答してください。該当する評価に◯をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

5-1) 留学前のあなたの文法の力はどのくらいであったと自己評価しますか。10 段階評価で回答してください。該当する評価に◯をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

5-2) 現在のあなたの文法の力はどれくらいだと自己評価しますか。10 段階評価で回答してください。該当する評価に◯をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

6-1) 留学前のあなたの語彙力はどのくらいであったと自己評価しますか。10 段階評価で回答してください。該当する評価に◯をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

6-2) 現在のあなたの語彙力はどれくらいだと自己評価しますか。10 段階評価で回答してください。該当する評価に◯をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

7) このプログラムを通じて、留学期間中、あなた自身の英語の勉強への取り組みを 10 段階評価で評価してください。該当する評価に◯をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

8) 帰国後、みなさんの英語力を TOEIC で測定していますが（J-SHINE は TOEIC の受験は要件とされていませんが、回答してください）、留学の英語学習の成果として TOEIC を使うことに対してどう思いますか。該当するものに◯をつけてください。

1. きわめて適切だと思う　2. どちらかといえば適切だと思う　3. どちらでもない
4. あまり適切だとは思わない　5. きわめて不適切だと思う

8-1) 8) の質問 8) に「3. どちらでもない」と答えられた方におうかがいします。
なぜ、適切だとも不適切だとも思わないのでしょうか。その理由をお答えください。

8-2) 8) の質問 8) に「4. あまり適切だとは思わない」「5. きわめて不適切だと思う」と答えられた方におうかがいします。
なぜ、適切だと思わないのですか。どういうもの（具体的な試験名）、どういう形（やり方）を使って留学で身につけた英語力を測定するのが適切だと考えますか。以下に具体的に記してください。

【留学先学校関係の質問】

II. あなたの所属していた学校のことについて質問します。

1) あなたの所属していた学校に対する総合評価・満足度はどれくらいですか。10 段階評価で回答してください。該当する評価に◯をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

1-1) 所属していた学校に対してあなたがつけた評価（減点あるいは加点）の理由はどういうところにありますか。具体的に記してください。

---

2) あなたが所属していた学校で出会った日本人の数の印象をお答えください。該当するものに◯をつけてください。

1. 非常に多い　2. 多い　3. どちらでもない　4. 少ない　5. 非常に少ない

2-1) そうした日本人環境の中に実際に身を置いてあなたが感じたことを自由に記してください。

---

3) 留学先の学校で出された宿題の量はどうでしたか。該当するものに◯をつけてください。

1. 非常に多い　2. 多い　3. どちらでもない　4. 少ない　5. 非常に少ない

3-1) 留学先の学校で出された宿題は、自分の英語力を伸ばすのに役立ったと思いますか。該当するものに◯をつけてください。

1. 大いに役に立った　2. 役に立った　3. どちらでもない
4. あまり役に立たなかった　5. まったく役に立たなかった

【留学そのものに関する質問】

III. あなたの留学そのものについて考えていたことを質問します。

1) あなたがこの留学に求めていたものは何ですか（複数回答可）。該当するものに◯をつけてください。

1. スピーキングの力を伸ばす
2. リスニングの力を伸ばす
3. リーディングの力を伸ばす
4. ライティングの力を伸ばす
5. 文法力をしっかりと身につける
6. 語彙力を伸ばす
7. 異文化体験（つらいことも楽しいことも含め）
8. 観光をたっぷり楽しむ
9. 海外に友人や知り合いを作る
10. その他（具体的に下欄に記してください）

---

2) あなたが参加したプログラムにかかった費用についてどう思いますか。該当するものに◯をつけてください。

1. 非常に高い　2. 高い　3. どちらでもない　4. 安い　5. 非常に安い

【現地での人間関係についての質問】

IV. あなたの現地での人間関係について質問します。

1) ホストファミリーとの間に何か問題（トラブル、不快・不愉快に感じたこと、戸惑ったこと、対応に苦慮したこと等）はありましたか。該当する方に◯をつけてください。

1. はい　2. いいえ

1-1) <u>1) の質問に「1. はい」と回答した方におうかがいします。</u>

どのようなことがありましたか。いくつかそうしたエピソードのある方は、あなたにとり、いちばん重大（深刻）と思われたエピソードを 1 つ教えてください。

2）留学先の学校に来ている他国からの留学生との間に何か問題（トラブル、不快・不愉快に感じたこと、戸惑ったこと、対応に苦慮したこと等）はありましたか。該当する方に◯をつけてください。

1. はい　　2. いいえ

2-1）2）の質問に「1. はい」と回答した方におうかがいします。
どのようなことがありましたか。いくつかそうしたエピソードのある方は、あなたにとり、いちばん重大（深刻）と思われたエピソードを１つ教えてください。

3）現地で出会った日本人やいっしょに留学に行った椙山の学生との間に何か問題（トラブル、不快・不愉快に感じたこと、戸惑ったこと、対応に苦慮したこと等）はありましたか。該当する方に◯をつけてください。

1. はい　　2. いいえ

3-1）3）の質問に「1. はい」と回答した方におうかがいします。
どのようなことがありましたか。いくつかそうしたエピソードのある方は、あなたにとり、いちばん重大（深刻）と思われたエピソードを１つ教えてください。

【日本にいる間にやっておくべき勉強についての質問】

IV. 留学前、日本にいる間にやっておくべき勉強について質問します。

1）もっと日本のことや名古屋のことを知っておけばよかった、勉強しておけばよかった、と思わされるような経験を現地でしましたか。該当する方に◯をつけてください。

1. そういう経験をした　　2. そういう経験はしなかった

1-1) 1) の質問で「1. そういう経験をした」と回答された方におうかがいします。
そのエピソードを簡単にお聞かせください。

---

2) あなたが大学（椙山）で受けてきた授業の中で、留学中、役に立ったと思えるような授業や、留学をするのであれば、その前にぜひ履修を薦めておきたい授業がありましたら、教えてください。
また、その理由も併せて記してください。

2-1) 事前に自分で勉強（自学自習）しておいた方がよい、と薦めたいようなことがありましたら、下欄に記してください。

【留学の事前・事後の指導についての質問】

IV. 今回の留学の前後に行われた指導について質問します。

1) 全体での説明会や各学校別に個別の活動として行われた先輩からの体験談は、実際に現地で生活する上で役に立ちましたか。該当するものに◯をつけてください。

1. 大いに役に立った　2. 役に立った　3. どちらでもない
4. あまり役に立たなかった　5. まったく役に立たなかった　6. 参加しなかった
7. そういうものはなかった

2）旅行代理店（JTB など）担当者からの旅行関係情報（保険、持ち物など）は役に立ちましたか。該当するものに◯をつけてください。

1. 大いに役に立った　2. 役に立った　3. どちらでもない
4. あまり役に立たなかった　5. まったく役に立たなかった

3）保護者会は保護者の方の留学に対する理解を深めるのに役に立ちましたか。該当するものに◯をつけてください。

1. 大いに役に立った　2. 役に立った　3. どちらでもない
4. あまり役に立たなかった　5. まったく役に立たなかった　6. 参加しなかった
7. そういうものはなかった

4）昨年の６月中旬、モナシュ大学から櫻木真由美さんがお見えになり、女性の視点から、留学中の危機管理についてお話をしてくださいましたが、彼女の話は、実際に現地で生活する上で役に立ちましたか。該当するものに◯をつけてください。

1. 大いに役に立った　2. 役に立った　3. どちらでもない
4. あまり役に立たなかった　5. まったく役に立たなかった　6. 参加していない

5）全体でのオリエンテーションや学校別の勉強会など（中期ブリッジでは、団結式なども含む）、出発までいろいろと行ってきましたが、その内容はいかがでしたか。該当するものに◯をつけてください。

1. 大いに役に立った　2. 役に立った　3. どちらでもない
4. あまり役に立たなかった　5. まったく役に立たなかった　6. 参加しなかった
7. そういうものはなかった

5-1）そうしたオリエンテーションや勉強会などの回数はいかがでしたか。該当するものに◯をつけてください。

1. 多すぎる　2. 多い　3. ちょうどよい　4. 少ない　5. 少なすぎる

6）学部主催の留学プログラムに関する情報は、『*Studying Abroad Programs 2010*』に掲載されていた内容で十分でしたか。該当する方に◯をつけてください。

1. はい　2. いいえ

6-1）<u>6）の質問で「2. いいえ」と答えた方におうかがいします。</u>
同冊子に現在掲載されている内容のほかに、どのようなことが情報として必要と考えますか。具体的に記してください。

---

7) 留学から帰国後、自分の英語力をはじめとし、英語圏で生活してきたことにより学び取った何かを失わないように、忘れないように普段努力をしていることはありますか。該当する方に◯をつけてください。

1. している　　2. していない

7-1) 7) の質問で「1. している」と答えた方におうかがいします。
具体的にどのような努力をしていますか。具体的に記してください。

8) 本年度履修登録した科目で、留学から帰国したことを意識して登録した科目はありますか。該当する方に◯をつけてください。

1. ある　　2. ない

8-1) 8) の質問で「1. ある」と答えた方におうかがいします。
上の質問に該当する科目名となぜその科目なのか、その理由を記してください。

8-2) 8) の質問で「2. ない」と答えた方におうかがいします。
なぜ、留学から帰国したことを意識して履修登録した科目がないのですか。その理由を記してください。

9）留学から帰国後の対応（事後の指導の一環）として、学部へのリクエストは何かありますか。

ありがとうございました。